

E-ISSN 2759-4238

Journal of Applied Humanities

Vol.1

March,2024

The Association for Applied Humanities

Contents

Special Issue

Digital Humanities at Oxford Summer School Participation Report

DHOxSS 2023 参加報告

——Digital Humanities の研究実践における「協働」について——

石井 康平…………… 1

データアプローチへの批判的評価

——Digital Humanities at Oxford Summer School 2023 Humanities Data コースから——

池田 美穂…………… 7

Digital Humanities と認知科学の融合

岩淵 汐音…………… 10

文化人類学におけるデジタルヒューマニティーズの可能性と課題

——オックスフォード大学サマースクールでの学びから——

笹本 美和…………… 15

DH サマースクールで獲得した新たな視点

——歴史研究者としての私がデジタルと向き合うということ——

若林 芽依…………… 22

アーカイブの問題とその虚構的な側面についての若干の考察

井上 颯樹…………… 28

Seeking the Unseen: A Digital Archive Journey from Oxford

MORITA, Kiho…………… 35

Article

農業普及誌における若年の女性農業者像

——雑誌『農業千葉』を対象とした予備的考察——

七星 純子…………… 38

Contents (English titles)

Special Issue

Digital Humanities at Oxford Summer School Participation Report

Report on Participation in DHOxSS 2023: "Collaboration" in Digital Humanities Research Practice

ISHII, Kohei 1

A Critical Evaluation of Data Approaches: Insights from the Digital Humanities at Oxford Summer School 2023 Humanities Data Course

IKEDA, Miho 7

How Digital Humanities and Cognitive Science join hands

IWABUCHI, Shione 10

The Potential and Challenges of Digital Humanities in Cultural Anthropology: Insights from Oxford Summer School

SASAMOTO, Miwa 15

New perspectives gained at the DHOxSS: What it means for me as a historian to face the digital realm

WAKABAYASHI, Mei 22

The essay on archival issues and fictional aspects that accompany them

INOUE, Satsuki 28

Seeking the Unseen: A Digital Archive Journey from Oxford

MORITA, Kiho 35

Article

Young Female Farmers in Japanese Agriculture: A Preparatory Analysis of the Image of Young Female Farmers in *Nogyo Chiba*

NANAHOSHI, Junko 38

執筆者一覧（掲載順）

石井 康平	千葉大学大学院人文公共学府 博士前期課程
池田 美穂	千葉大学大学院人文公共学府 博士前期課程
岩淵 汐音	千葉大学大学院人文公共学府 博士前期課程
笹本 美和	千葉大学大学院人文公共学府 博士前期課程
若林 芽依	千葉大学大学院人文公共学府 博士前期課程
井上 颯樹	千葉大学大学院人文公共学府 博士前期課程
森田 貴帆	千葉大学大学院人文公共学府 博士前期課程
七星 純子	千葉大学人文社会科学系教育研究機構 特任研究員

投稿規程

- 1 投稿資格：特に設けない。
- 2 内容：原則として未発表のもので、かつオリジナリティがあること。
- 3 使用言語：原則として使用言語は英語、日本語もしくは中国語とする。いずれの言語で執筆した場合も英文要旨を作成する。
- 4 原稿の種類：論説、研究ノート、書評、活動紹介、会議報告、資料紹介ないし資料解題等とする。
- 5 原稿の提出：電子ファイルで入稿する。原稿は Word 等のワープロソフトで作成されたファイルと PDF ファイルを提出する。
- 6 論説等の長さ：論説の場合、図表含め 2 万字以内、研究ノートの場合 1 万 6 千字以内とする。書評は 1 万字以内とする。その他のカテゴリーについては、原則として 4000 字以内とする。なお、図表などの転載許可、著作権処理などについては、著者の責任において行うこと。
- 7 原稿の書き方：原稿は 1 頁 40 字×30 行で作成する。ネイティブ・ランゲージ以外で執筆する場合は、ネイティブチェックを受けたうえで、提出することとする。
- 8 原稿の採否：査読に基づく審査により、臨床人文学研究会編集委員会が採否を決定する。
- 9 採用時の変更・訂正：編集委員会から「論説」「研究ノート」等カテゴリーの変更、ならびに内容の修正を求めることができる。
- 10 著者校正：初校に限り著者校正を行う。ただし文章、図表、写真の追加などの大幅な修正は認めない。

付則 1 以上の規程は 2023 年 11 月 30 日以降の投稿に対して適用する。

問い合わせ先：千葉大学大学院人文科学研究院 米村千代研究室内 臨床人文学研究会
yonemura※chiba-u.jp（※を@に変更する）

Submission Guidelines

1. **Eligibility for Submission:** No specific requirements.
2. **Content:** Submissions should be original and unpublished.
3. **Language:** Manuscripts should be in English, Japanese, or Chinese. An English abstract must accompany manuscripts written in any language.
4. **Types of Manuscripts:** Includes articles, research notes, book reviews, activity reports, conference reports.
5. **Submission Method:** Manuscripts must be submitted as electronic files. Both Word processor files (such as Word) and PDF files should be submitted.
6. **Length of Manuscripts:** (Only in Japanese.)
7. **Manuscript Format:** Manuscripts should be formatted to 40 characters per line by 30 lines per page. If writing in a non-native language, manuscripts should be proofread by a native speaker before submission.
8. **Acceptance or Rejection:** The Association for Applied Humanities Editorial Committee will decide on acceptance based on peer reviews.
9. **Modifications and Corrections upon Acceptance:** The Editorial Committee may request changes to the category (e.g., from "article" to "research note") and content modifications.
10. **Author Proofreading:** Authors will proofread only the first proofs. Major revisions, such as additions of text, tables, or photographs, are not permitted.

Supplementary Provision 1: These regulations apply to submissions after November 30, 2023.

Contact Information: The Association for Applied Humanities, Yonemura Lab, Graduate School of Humanities, Chiba University
Email: yonemura※chiba-u.jp (replace ※ with @)

Journal of Applied Humanities Vol.1

2024年3月29日発行

発行 The Association for Applied Humanities

臨床人文学研究会

〒263-8522 千葉市稲毛区弥生町 1-33

千葉大学大学院人文科学研究院

米村研究室

DHOxSS 2023 参加報告

—— Digital Humanities の研究実践における「協働」について ——

Report on Participation in DHOxSS 2023: "Collaboration" in Digital Humanities Research Practice

石井 康平
ISHII, Kohei

Abstract

This paper delves into two major themes. First, it elucidates the challenges of arbitrariness that arise in data design and analysis, and advocates for the integration of these two processes. Second, it reflects on the training provided at DHOxSS and describes how the exercises conducted at DHOxSS managed to achieve integration of data design and analysis, and fostering active mutual communication among the parties. From these two discussions, this paper will emphasize the importance of "collaboration" in Digital Humanities.

1 はじめに

近年、Digital Humanities (以下、DH) の技術を活用した研究実践が世界的な潮流をなしている。DH とは、デジタルを活用して人文学の研究手法を刷新し、人文学知の拡張を目指す (Burdick et al., 2012) 学術的動向である。

報告者は、2023年7月3日から7月7日にかけて、イギリスのオックスフォード大学にて開催されたサマースクールである「Digital Humanities at Oxford Summer School (以下、DHOxSS)」に参加した。そこで、報告者は、Pythonによる演習を通じて、データの整理や構造化、可視化に関するコースである「Applied Data Analysis」を受講し、プログラミングの手法等を学んだ。この機会を通じて、報告者は、データ設計および分析における関係者間のコミュニケーションに関する気づきを得た。本稿では、このサマースクールの経験を踏まえて、データ設計および分析の一体化と関係者間のコミュニケーションの重要性を示唆し、デジタル活用場面における「協働」の意義について記述する。

本稿の構成として、2章では、データの設計や分析における恣意性の問題を取り上げ、データの設計および分析の一体化を図る有用性を示唆する。次に、3章では、2章の恣意性の議論を踏まえて、DHOxSSでの活動を振り返りつつ、データの設計や分析におけるコミュニケーションの重要性を述べ、DHの研究実践における「協働」の必要性を示唆する。最後に、

4章において、報告者自らの研究領域に3章の議論を引き付け、井上(2004)における「協治」の議論からDH研究者としての研究姿勢を提示し、本稿の議論を総括する。

2 データ設計および分析における恣意性

本稿では、まず、茨城県議会の会議議事録⁽¹⁾(以下、会議録)をテーブルデータに整理することを例に恣意性について議論したい。会議録のデータには、一つの発言に対して、年月日、会議名、発言者、本文が含まれている。テーブルデータには、行(row)と列(column)、が存在する。この内、列が各セルの属性を付与している。加えて、列のインデックスが各セルの属性を説明していることになる。では、この列のインデックスはどのように決定されるのであろうか。このインデックスは、データの設計者が用途を想定して設計されていると考えられる。例えば、報告者は、図1のように発言者の属性を「発言者」と設計した。しかしながら、ある人は、図2のように「人物」とするかもしれないし、はたまたある人は、図3のように「人名」と「役職」を区分して2つの列で表現するかもしれない。つまり、この列の設計は、あくまでもそのデータの設計者が任意で行うことができる。ここで、一つの疑問を呈したい。果たして、データの設計者は、そのデータ設計の上で、恣意性を排除できているのであろうか。列は、データの設計者が、その後の分析など用途を考慮して活用しやすいように工夫するであろう。しかしながら、その活用しやすさには、少なからず設計者の主観的な処理を含んだ上で決定されていると考えられる。つまり、データの設計には、少なからず恣意性が存在していると考えられる。

また、データを分析する場合には、どのようなことがいえるだろうか。例えば、議事録における特定の発言の発言者について、ある年度内の頻度を分析することを想定しよう。図3のように発言者が「発言者名」と「役職」に区分されている場合、どのような分析が可能であろうか。この場合、「発言者名」で頻度を分析することもできるし、「役職」で頻度を分析することもできよう。つまり、データ分析においては、分析者が使用するデータを選択する、言うなれば、分析者の恣意性が生じていることになる。

このように、データの設計および分析それぞれの場面において、行為者に恣意性が生じることが考えられるのである。

年月日	会議名	発言者	発言内容
2023年2月14日	令和5年防災環境産業常任委員会	川股県民生活環境部長	それでは、県民生活環境部資料1と右上のほうに記載のあります資料のほうを御用意いただきたいと思えます。まず、県民生活環境部所管の事務事業の概要につきまして御説明いたします。1ページを御覧願います。まず、1の基本方針でございます。県民生活環境部では、大きく分けて3つの施策、(1)の生活関連施策、(2)の文化・スポーツ関連施策及び(3)の環境関連施策を推進しております。初めに、(1)の生活関連施策でございます。まず、消費生活の安全確保につきましては、市町村相談体制の整備推進や消費者教育の充実、悪質事業者に対する監視・指

図 1

年月日	会議名	人物	発言内容
2023年2月14日	令和5年防災環境産業常任委員会	川股県民生活環境部長	それでは、県民生活環境部資料1と右上のほうに記載のあります資料のほうを御用意いただきたいと思えます。まず、県民生活環境部所管の事務事業の概要につきまして御説明いたします。1ページを御覧願います。まず、1の基本方針でございます。県民生活環境部では、大きく分けて3つの施策、(1)の生活関連施策、(2)の文化・スポーツ関連施策及び(3)の環境関連施策を推進しております。初めに、(1)の生活関連施策でございます。まず、消費生活の安全確保につきましては、市町村相談体制の整備推進や消費者教育の充実、悪質事業者に対する監視・指

図 2

年月日	会議名	発言者名	役職	発言内容
2023年2月14日	令和5年防災環境産業常任委員会	川股	県民生活環境部長	それでは、県民生活環境部資料1と右上のほうに記載のあります資料のほうを御用意いただきたいと思えます。まず、県民生活環境部所管の事務事業の概要につきまして御説明いたします。1ページを御覧願います。まず、1の基本方針でございます。県民生活環境部では、大きく分けて3つの施策、(1)の生活関連施策、(2)の文化・スポーツ関連施策及び(3)の環境関連施策を推進しております。初めに、(1)の生活関連施策でございます。まず、消費生活の安全確保につきましては、市町村相談体制の整備推進や消費者教育の充実、悪質事業者に対する監視・指

図 3

3 データ設計および分析における協働と DH0xSS

先述のようにデータの活用における恣意性の議論を踏まえると、データの取り扱いにおける「協働」についても気づきを得ることができる。

前述の恣意性に即すならば、データの設計者と分析者が同一の場合には、作業が一貫して行われるために、設計と分析に齟齬は生じにくいと考えられる。しかしながら、設計者と分析者が異なる場合には、どのような状況が起こり得るだろうか。端的に言えば、設計者と分析者間でデータに対する認識にズレが生じ、データの分析への互換性に支障をきたすと考えられよう。先程のある年度内の議事録における発言者を分析する場合には、分析者が「発言者名」と「役職」の頻出をそれぞれ分析したいとしても、用意されたデータが図1のように「発言者」として一つの行に集約されていたならば、すぐに分析に移ることはできず、一度加工が必要となる。

では、この協働の観点から、DH0xSSの「Applied Data Analysis」の演習を振り返りたい。本演習は、データの設計と分析が一体となっていることが極めて重要である。つまり、データの設計から分析まで一体的に取り扱うことにより、データの設計と分析に齟齬が生じないよう、コース設計がなされていた。初日から3日目にかけては、データの整理について取り扱い、リレーショナルデータベースを用いて、IDに基づくデータ間の紐づけを学んだ。4日目には、探索的データ分析の手法を学んだ。そして、5日目には、社会ネットワーク分析やデータのマッピング等によるデータの可視化について学んだ。

このいずれの活動においても特徴としてあるのが、データ設計および分析についての活発な議論がなされていたことである。プログラミングにあたり指導者と受講者の相互のコミュニケーションならびに受講者同士の意見交換が活発に行われていた。これにより、指導

者および受講者のすべてが同一の課題に対し、協働してより良いモデルの構築を目指すことができていた。

加えて、プログラミングコードや資料の共有にも配慮がなされていた。Slack ならびに GitHub、Python Binder を柔軟に組み合わせて使用することで、多様なコードや資料が関係者全員に行き渡り、作業の協働性が高い状態に保たれていた。そして、Slack は、コミュニケーションツールとしても活用され、演習外の関係者間の相互コミュニケーションの場としても機能していた。

本演習コースにおける協働性は、まさに DH 研究者によって議論される「Methodological commons (方法論的共有地)」の実践と言える。「Methodological commons」は、DH 研究者が、学問分野間の方法論的、認識論的、規範的な隔たりを埋めることを視野に入れて、自らの研究実践を概念化、理論化したものである (Anderson et al., 2010 : 3782)。「Methodological commons」とは、DH 研究者間で方法や技術の共有する地平を模索することを意味する。端的に言い換えれば、「Methodological commons」は、DH の手法や技術を通じた研究者間の協働の様相である。本演習コースも上記のように協働的な実践が行われており、報告者は「Methodological commons」の実践場を肌で感じてきたと言える。

4 「Methodological commons」における DH 研究者の研究姿勢と「協働」

このように、報告者は、DH0xSS において、「Methodological commons」の実践場を目の当たりにし、データの設計および分析の一体化とそこでの関係者間のコミュニケーションの重要性に気づいた。

ここで、報告者の研究テーマの一つであるコモンズ論に寄せて、井上 (2004) の「協治」の議論から「Methodological commons」を紐解いてみたい。そもそも、井上 (2004) の示す「協治」とは、「中央政府、地方自治体、住民、企業、NGO・NPO、地球市民などさまざまな主体 (利害関係者) が協働 (コラボレーション) して資源管理を行う仕組み」(井上 2004 : 140) と定義されており、簡潔に言えば「協働ガバナンス (collaborative governance)」(井上 2004 : 140) のことである。井上 (2004) によると、この「協治」を高める要素として、「開かれた地元主義 (open-minded localism)」と「かかわり主義 (principle of involvement/commitment)」が提案されている。「開かれた地元主義」とは、「地域住民が中心になりつつも、外部の人々と議論して合意を得たうえで協働 (コラボレーション) して森を利用し管理する」(井上 2004 : 139) 理念のことである。対して、「かかわり主義」とは、「なるべく多様な関係者を地域森林『協治』の主体としたうえで、かかわりの深さに応じた発言権を認めようという理念」(井上 2004 : 142) のことである。DH に即して言えば、多様な関係者は様々な研究領域の研究者であり、地域森林は各々の研究領域における人文学のデジタル課題と捉えることができる。つまり、DH の裾野に関わることで、自身の研究領域ならびに DH の領域の発展を試みる実践と言える。

加えて、「協治」において重要とされるのが、「素民」と「有志」の協働である。「素民」とは、「ふつうの人々」に対する呼称であり、ある特定の地域の課題において、課題への意識を共有しているかどうかに関わらず、その当該地域の住民一般と解釈できる。対して、「有志」とは、「ある物事に興味を持ち関わろうとする意志のある人」(井上 2010: 255)を示し、地域住民に限らず科学者など地域外の人々も含めてある課題に対して意識を共有するものである。この「素民」と「有志」について、地域を研究領域に読み替えてDHの研究姿勢に当てはめるならば、それは「有志」としての姿勢と言えよう。DHでは、様々な領域の研究者が情報学という裾野に集まり、主に人文学におけるデジタル活用について議論する。ここで重要となるのは、技能を持ち合わせているかに限らず、人文学でデジタルを活用することに興味を持ち、そこに参与しようとする意欲である。まさにこの点は「有志」の特徴に合致する。しかし、DHの研究者は「素民」としての特徴も同時に持ち合わせていることを忘れてはならない。DH研究者にも各々の研究領域があり、その領域の研究課題を抱えている。つまり、DH研究者には、その研究者自身の領域における「素民」としての様相とDHにおける「有志」としての様相の両者を併せ持つと言えよう。そして、この両者を併せ持つからこそ、先述のDHにおける「開かれた地元主義」いうなれば開かれた研究領域と、「かかわり主義」つまり情報学による協働的实践が成り立つのである。

このように、DH研究者は、「素民」と「有志」両者の研究者像を持ち合わせていると言えよう。つまり、「Methodological commons」の議論において重要となるのは、異分野開放的な研究姿勢と関係者間の相互作用である。DH研究者に求められることをより端的に換言すれば「協働」なのではないだろうか。報告者は、今後もDHに関する研究活動に従事するにあたって、「協働」を重視し、DHの発展に寄与していく所存である。

注

- (1) 「茨城県議会 会議録の検索と閲覧」(<https://www.pref.ibaraki.dbsr.jp/index.php/> 2024年3月11日閲覧)からダウンロードできるものを対象とする。以下の例では、2023年2月14日の「令和5年防災環境産業常任委員会」における川股県民生活環境部長の発言を対象とする。

参考文献

- Anderson, S. et al. (2010) “Methodological commons: arts and humanities e-Science fundamentals”, *Philosophical Transactions of the Royal Society A: Mathematical, Physical and Engineering Sciences*, Volume 368(1925): 3779-3796.
- Burdick, A. et al. (2012) *Digital Humanities*, MIT press.
- 井上真 (2004) 『コモンズの思想を求めて カリマンタンの森で考える』岩波書店。
- (いしい こうへい 千葉大学大学院人文公共学府博士前期課程)

データアプローチへの批判的評価
——Digital Humanities at Oxford Summer School 2023 Humanities
Data コースから——

A Critical Evaluation of Data Approaches: Insights from the Digital
Humanities at Oxford Summer School 2023 Humanities Data Course

池田 美穂
IKEDA, Miho

要旨

本稿は、Digital Humanities Oxford Summer School2023 の humanities Data コースに参加した経験とそこでの学びについてまとめたものである。デジタルヒューマニティーズの手法が研究にもたらす主観性と影響を理解し、それらをどのように研究に応用するかについて深く考察した。また、デジタル資料の管理と活用に関する FAIR 原則と CARE 原則を学び、研究データの整理、分析、共有における重要性と実践的な指針を得ることができた。

Abstract

This paper provides a summary of my experience participating in the humanities data course at the Digital Humanities Oxford Summer School 2023. It delves into understanding the subjectivity and impact that digital humanities methodologies bring to research, exploring how these methodologies can be effectively applied. Additionally, it discusses the acquisition of knowledge on the management and utilization of digital materials through the FAIR (Findable, Accessible, Interoperable, Reusable) and CARE (Collective benefit, Authority to control, Responsibility, Ethics) principles, thereby obtaining crucial insights and practical guidelines for the organization, analysis, and sharing of research data.

1 はじめに

2023年7月3日～7日に開催された、Digital Humanities Oxford Summer School2023@キープルカレッジオクスフォード（以下、サマースクール）は、デジタルヒューマニティーズを学ぶための短期プログラムである。キャリアの段階を問わず、全世界各地から大学教員、研究者、学生、プロジェクトリーダー、IT 関連職、図書館や博物館、アーキビスト等、幅広い分野の参加者 100 名以上が集った。本レポートでは、このサマースクールに卓越大学院プログラムの一環として参加し、そこでの経験とデジタルヒューマニティーズを自身

の研究にどのように活用するか考えたことについてまとめる。

私がデジタルヒューマニティーズの分野に初めて出会ったのは、大学院修士課程に入学してからのことである。情報技術と人文学の融合を基に、従来の研究方法に新しい視点でアプローチしていくという観点に興味と関心を持ってきた。修士課程での1年間は、そもそもデジタルヒューマニティーズはどのようなディシプリンであるのか、基礎部分を実践的に学修してきた。例えば、手法に関しては、KH コーダーによる計量テキスト分析や GIS による地理情報空間の分析、基礎的なプログラミングを学んだ。他にも、史料保存や分析の場面におけるデジタルアーカイブにおけるデジタルヒューマニティーズを学修してきた。

しかしながら、それらデジタルヒューマニティーズの研究や手法を、実際にどのように自身の研究に統合させることができるか、また、将来的な応用可能性についても検討ができていなかった。そこで、今回サマースクールでの目的は、デジタルヒューマニティーズが研究にもたらすインパクトを知り、その上で、今後自身の研究にどのように応用していくのかを考えるヒントを得ることであった。

事前準備としては、卓越大学院プログラム担当教員との面談を行い、適切な受講コースの選択、関連書籍の精読 Humanities Data のコースで必要なアプリケーションのダウンロードと試運転を行った。また、公開されているプログラム集を基に専門用語の訳語集の作成を行った上で講義に臨んだ。

2 Humanities Data コースの概要

本サマースクールでは、8つのコースがあり、自身の興味関心に合わせて事前に選択をする形式であり、選択したコースごとに教室で講義が行われた。今回は、Humanities Data のコースに参加した。Humanities Data コースは、3名のコーディネーターが順に講義を行う形式で構成されていた。本コースの受講生は20名程度で、研究者や大学教員のみならず、図書館員や研究者をサポートするアシスタントの参加者もいた。

このコースは人文科学研究プロジェクトにおける資料素材 (source materials) をより効果的に使用するための取り組みについて焦点を当てており、講義と演習を組み合わせた形態であった。具体的には、人文科学のデータを扱う際の基準や手法、ツールの選択を適切に行うことの重要性、そして、適切な収集をテーマとしていた。

講義の中では、具体的なデータの収集、データ検索、整理方法、処理、提示方法についてツールを活用しながら学んでいった。演習で使用したツールは、Gephi、OpenRefine、GIS の3点である。まず、講義による DH 技術の理論や要素の説明があり、その後アプリケーションの使用方法についてレクチャーで実際に使用しながら演習問題を解く形であった。

特に興味深かった講義は、Neil Jefferies による人文科学データアプローチの批判的評価の講義であった。この講義は、そもそもなぜ、デジタルヒューマニティーズ的アプローチを学ぶのか、また、なぜ、伝統的な人文科学のフィールドに取り入れる必要があるの

かという内容であった。

そもそも、デジタルヒューマニティーズには様々な技術や手法が存在する中で、真に中立的なツールは存在しておらず、それらを作成した人々の主観的な意図が含まれているという話から講義はスタートした。例えば、どのような順番で検索結果を表示しているのか、そのデータベースで扱う資料はどのようにデジタル化の対象として選択しているのかといった情報抽出の際の判断などが挙げられた。だからこそ、研究において資料を収集する際には、そのツール作成者の主観性を踏まえる必要があり、それぞれのツールがどのように構築され、どのような仕組みで検索結果が提示されるのかを知らなければならないと説明がであった。「どのような」文献を集めるかを重視し「どのように」文献を収集すべきかという視点は自身の研究にも取り入れていきたい。デジタルヒューマニティーズといえ、その手法を取り入れることに目が向きがちであった。しかし、この講義からは、デジタルヒューマニティーズ的な考え方や概念を研究に取り入れる形でも活用、応用していくことができるのではないかという学びを得ることができた。

さらに、講義の中では、メタデータのオントロジーや分類法、持続可能な識別子 (DOI, ORCID) と API に関して、デジタルリソースの保存、アクセス、再利用に関しての実践的な指針も提示された。そこで、FAIR 原則と CARE 原則についての紹介があった。FAIR とは、Findable, Accessible, Interoperable, Reusable の頭文字をとったもので、CARE とは、Collective benefit, Authority to control, Responsibility, Ethics の頭文字をとったものである。これらは、デジタル資料の検索可能性、アクセシビリティ、相互運用、再利用を改善するためのガイドラインを提供するための考え方である。今後、多くの資料がデジタル化していく中で、これらの原則は研究データをより責任ある方法で管理していくためにも重要な概念であると説明があった。この視点は、自身が社会調査を設計・実施する上でも意識することが必要なものである。データがどのように構造化され、どのように意味づけられるべきか理解していれば、研究データの整理と分析に役立てることができるだろう。他にも、個人ではなく複数人で研究を行う際のデータ共有するための基盤を構築できていれば、データの相互運用性が向上するだけでなく、より複雑な分析が可能となるだろう。そして、これらを実践することは、再現性を確保するために重要である。

サマースクールからは、実践的なツールの活用法を学ぶことができた。人文学と社会科学は、研究の目的、手法、目的、メタデータの付与等様々な点において、異なる位置づけを持っている。しかしながら、デジタルヒューマニティーズの考え方を研究に適切に取り入れることで、より再現性の高い研究になるのではないかという、今後の研究への応用のヒントを得ることができた。

(いけだ みほ 千葉大学大学院人文公共学府博士前期課程)

Digital Humanities と認知科学の融合

How Digital Humanities and Cognitive Science join hands

岩淵 汐音

IWABUCHI, Shione

Abstract

I acquired knowledge on how machine learning and programming with Python contribute to natural language processing (NLP).

Subsequently, I proposed the possibility of a fusion and mutual development between Digital Humanities and Cognitive Science, the latter being my major area of study.

Digital Humanities Oxford Summer School に際し、著者は自然言語処理における機械学習と Python を用いた実装法について学んだ。機械学習による自然言語処理というかけ橋によって、著者が先行する認知科学と Digital Humanities が現在以上に融合し互いに発展する可能性があると考えたため述べていきたい。

1 Text to tech

著者は “Text to Tech” に参加した。このプログラムは自然言語処理を人文学分野へ応用する技術を身に付けるための足掛かりとして提供されていた。このコースでは四則演算やループ処理などの Python の初歩的なプログラミングを試したうえで、機械学習による自然言語処理の基礎知識と実装方法を学んだ。

2 Transformer と Attention

5日間の講義の中で、著者は特に Transformer という翻訳技術に関する講義に強い関心を抱いた。講義によると、Transformer とは Attention という技術を用いたディープラーニングである。Attention とは、「認知的な注意」をもとにし、文中で重要な情報に着目する機械学習の学習方法である。著者は認知科学を専攻しており人が何をどのように分類しカテゴリーを形成するか—例えば、ペンギンとカラスはどちらのほうがより鳥らしいのか、「田舎者」とはどのような人か、バナナはおやつに入るのか、…—について研究している。そのため、文中の情報の重要度や意味のつながりに着目する Attention、分類結果をもとに自動翻訳する Transformer に興味を持った。なお、「認知的な注意」と鍵括弧付きで表現したのは、Attention があくまで人の認知プロセスを再現したわけではないという点、一般における「注意」という言葉が認知科学分野において「衝動性」「注視」「選択的注意」など様々な現象

をさす点の2点に留意すべきと著者が判断するからである。このうち、「Attention が人の認知プロセスを再現しているわけではない」という点については、「認知科学におけるモデルとしての機械学習の限界と使命」の節でも言及する。

3 自閉スペクトラム症者の認知特性を文章から分析する

ところで、著者の研究テーマは自閉スペクトラム症 (Autism Spectrum Disorder, ASD) 者におけるカテゴリー学習の特性だが、ASD 者と定型発達 (Typically developed, TD) 者の中で単語間の意味的なつながりの強度やカテゴリーの階層性についてどのように異なるか分析し利用する際に、Transformer や Attention が有効に利用できる可能性があるだろう。

ASD とは発達障害の一種である。表情から相手の考えていることが分からないなどの社会的なコミュニケーションの困難さ、数字や規則性に強いこだわりを持つといった細部へのこだわりなどが見られる (American Psychiatric Association, 2013)。ASD 者にこのような現象が起こる原因として、情報の統合が弱い (Happé & Frith, 2006)、細部への注意が強化されている (Mottron et al., 2006) などがあることがこれまでに示唆されている。

研究テーマを示すもう一つのキーワードである「カテゴリー」について、認知科学におけるカテゴリーとは事物のまとまりある集合のことを指す (谷口, 2020)。また、ロッシュら (1976) によると、カテゴリーが上位水準・基本水準・下位水準の3つの水準からなる階層構造をもつという。

細部へこだわる特性のある ASD 者は、カテゴリーを推定する際により細かくわけることやある対象が属するカテゴリーをより詳細に答えることが考えられる。例えば、コーギーを見た際に「これは何ですか?」と聞かれ「犬」ではなく「コーギー」もしくは「ウェルシュコーギー・ペンブローク」と ASD 者がより詳細に答える傾向が強くなるというようなことが起こるだろう。ロッシュらの説明に基づいて整理すると、ASD 者では「コーギー」などの具体的な犬種などが属する下位水準が想起されやすいと考えられる。テキストデータを用いて単語の意味のつながりの強度を分析し、ASD 群と TD 群で比較することによって、

ASD 者のカテゴリーの階層性における TD 者との相違点について示唆することができるだろう。

4 認知科学と Digital Humanities

前節で述べたように、認知科学における個々の研究は人工知能技術から多大な恩恵を受ける。人工知能研究のターニングポイントとなったダートマス会議出席者の多くが認知科学研究の中心人物となった (植田, 2021) ことからわかるように、認知科学は人工知能研究と発展を共にしてきた (内村他, 2016)。そのため、人工知能研究から認知科学研究へ様々な貢献があったことは自明である。

また、認知科学が学際的に発展しており、人文学の見識も認知科学へ寄与してきた。スタンフォード哲学百科事典（1996；日本語訳 谷口、2020）は、認知科学を次のように説明している。

——精神と知性に関する学際的な研究であり、哲学、心理学、人工知能、脳神経科学、言語学、人類学などを含む。——

カテゴリー研究において人文学の貢献があった具体的な例として、言語相対性仮説が挙げられる。サピア＝ウォーフ仮説とも呼ばれるこの仮説では、私たちは言語を用いて自然界をカテゴリー化し、言語が変わればカテゴリー化も変わることが示唆されている（箱田他、2010）。この言語相対性仮説が言語学者・文化人類学者を中心に議論され（今井、2000）、反論も起こるなど様々な展開が見られている（例 Rosch, 1973）。認知科学が勃興したのは1950年代（スタンフォード哲学百科事典、1996）といわれているが、かねてより認知科学は人文学の影響を受けてきたのである。

このように、認知科学分野では、分野誕生の当初からコンピュータ科学・ならびに人文学と常にかかわりあいながら研究が進められてきた。それでもなお、Digital Humanities は認知科学を発展させる大きなカギを持つと考えられる。認知科学分野では伝統芸能など、人文学が対象としてきたテーマを扱うこともある。例えば、工藤他（2022）の研究では、和歌山県日高郡日高川町にある道成寺に伝わる伝説をもとにした作品である道成寺伝説、および道成寺伝説をもとにした歌舞伎舞踊である『京鹿子娘道成寺』に関する Wikipedia の説明を分析し、ユーザーの興味や知識量に合わせてこれらの作品に関する説明やうんちくを語る機構を提案した。このように、Digital Humanities の技術はすでに認知科学へと越境し始めている。

また、Digital Humanities が認知科学に貢献するのみならず、認知科学もまた Digital Humanities に貢献するだろう。工藤他（2022）ら自身も言及しているように、相手の興味や知識のレベルに合わせた教育を与えることは、文化遺産をより効率的に継承することを可能にするだろう。このことから、工藤ら（2022）の研究は、人文学の成果をデジタル技術によって市民に発信するという Digital Humanities の使命を全うすることにおいて大いに期待できるだろう。このように、認知科学もまた Digital Humanities, ひいては人文学の発展の力になるだろう。

5 一人の認知科学者としての Digital Humanities

では、一人の認知科学者、特にカテゴリー学習について研究する認知科学者としては Digital Humanities からどのような貢献を得られるのか。それはテキストデータを分析しカテゴリーの階層を検討する際に、材料となるテキストデータの幅が広がることで時代や文化の違いがカテゴリー学習に与える影響も比較できるようになることだろう。認知科学分野で

も言語に関連する研究は盛んである。例えば、2023 年度の日本認知科学会の年次大会に当たる日本認知科学会第 40 回大会では、49 の研究が「言語」を、9 つの研究が「自然言語処理」をキーワードとしていた。櫃割ら (2023) の俳句生成 AI に関する研究のように、現代以前のデータを利用したものも発表予定である。公募により採択された研究が 226 件のため、招待講演なども考慮すると約 5 分の 1 の研究が言語を対象としている。しかし、今回の大会以外でもカテゴリ研究や ASD に関して自然言語処理を利用してアプローチする研究は少ない。そのため、異なる時代や文化の違い、その他個人特性の強度の違いがカテゴリの階層性に与える影響について検討するうえで、大規模なテキストデータを分析することは研究の視野を広げるだろう。このようなかたちでカテゴリ学習を研究する著者は Digital humanities から恩恵を受けるのである。

6 認知科学におけるモデルとしての機械学習の限界と使命

ただ、人文学の研究で得られたデータを機械学習で分析することは人の認知プロセスを検討するうえで限界点を持つ。それは、Transformer と Attention の節で言及した通り、機械学習、特に近年のディープラーニングが人の認知を模しているわけではないため、機械学習のアルゴリズムや処理結果が人の認知をそのまま反映しているのではないという点である。

それでは人文学で得た膨大なデータを機械学習で分析することは無駄なのだろうか？ 答えは No である。谷口 (2020) は機械学習を用いたモデルを人の認知研究に利用することについて、ある現象を説明することが可能なモデルを作ることには意義があると述べている。そのため、人のデータを機械学習により分析し、カテゴリ学習における個人差を説明するモデルを作ることにも肝要だろう。

さらには、このような分析により、現在認知科学および人文科学で定説とされている理論に対し反証を述べる、つまり人間の研究者が今まで見落としていた現象を機械学習による分析結果から見出す可能性があることもまた重要な意義だろう。認知科学のカテゴリ学習という小さなテーマにとどまらず、認知科学全体や他の分野にも全く新しい視点をもたらす可能性を持つからである。

7 終わりに

今回のサマースクールで得た機械学習の見識について、認知科学と Digital Humanities の融合という観点を中心に述べてきた。大規模なテキストデータを分析する技術により人の認知プロセスを理解しようとする認知科学、認知科学の産物を受けた Digital Humanities の可能性について、具体的な研究も交えつつ希望を語ってきたつもりである。

最後に、両分野の発展を願い結びの言葉とする。

参考文献

- American Psychiatric Association, 2013. Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders (DSM-5®). *American Psychiatric Pub.*
- 箱田裕司・都築誉史・川端秀明・萩原滋 (2010) 『認知心理学 (New Liberal Arts Selection)』 有斐閣
- Happé, F., Frith, U., 2006. The weak coherence account: detail-focused cognitive style in autism spectrum disorders. *J. Autism Dev. Disord.* 36(1), 5-25. <https://doi.org/10.1007/s10803-005-0039-0>.
- 櫃割仁平・上田祥行・尹優進・野村理朗 (2023, September 7-9) 「AI との共創で生まれた俳句の美しさに迫る[OS 発表]」 日本認知科学会第 40 回大会
- 今井むつみ (2000) 「サピア・ワーフ仮説再考——思考形成における言語の役割, その相対性と普遍性——」 *The Japanese Journal of Psychology*, 71, 5, 415-433
- 工藤舜太・小野淳平・小方 孝 (2022, September 8-10) 道成寺物再現システムと説明/蘊蓄生成機構の統合[ポスター発表] 日本認知科学会第 39 回大会
- Mottron, L., Dawson, M., Soulières, I., Hubert, B., Burack, J., 2006. Enhanced perceptual functioning in autism: an update, and eight principles of autistic perception. *J. Autism Dev. Disord.* 36(1), 27-43. <https://doi.org/10.1007/s10803-005-0040-7>.
- 日本認知科学会・谷口忠大 (2020) 『越境する認知科学 5 心を知るための人工知能—認知科学としての記号創発ロボティクス—』 共立出版
- Rosch, E. 1973 Natural categories. *Cognitive Psychology*, 4, 328-350
- Rosch, E., Mervis, C. B., Gray, Q., Johnsen, D., & Boyes-Braem, P. 1976 Basic objects in natural categories. *Cognitive Psychology*, 8, 382-439
- Stanford Encyclopedia of Philosophy. First published Mon Sep 23, 1996; substantive revision Mon Sep 24, 2018.
- 内村直之・植田一博・今井むつみ・川合伸幸・嶋田総太郎・橋田浩一(2016). 『はじめての認知科学』 新曜社
- 植田一博 (2021) 「認知科学の過去・現在・未来に関する私見」 『認知科学』 第 28 巻第 3 号 (2021)pp. 410-418 <https://doi.org/10.11225/cs.2021.022>

(いわぶち しおね 千葉大学大学院人文公共学府博士前期課程)

文化人類学におけるデジタルヒューマニティーズの可能性と課題 ——オックスフォード大学サマースクールでの学びから——

The Potential and Challenges of Digital Humanities in Cultural Anthropology: Insights from Oxford Summer School

笹本 美和

SASAMOTO, Miwa

Abstract

This report documents my participation in the “Digital Humanities at Oxford Summer School 2023”. The summer school took place from 3rd to 7th July 2023 at Keble College, University of Oxford. I attended the course titled “Introduction to Digital Humanities”, which provided an overview of the various theories and practices of Digital Humanities in recent years. For example, important concepts for applying digital processes to the humanities (such as digital archiving and computational thinking), methods of digital humanities (community generated digital content, relational database, digital scholarly editing, etc.), and analytical tools that can be used in humanities (Jupyter Notebook, Ngrams, Voyant, etc.). In addition, recent examples of digital humanities research and efforts to build digital collections were also discussed. This report reviews the content of the above course.

As a cultural anthropology major, my objective was to learn how digital humanities methods can be incorporated into cultural anthropological research. Therefore, this report aims to elucidate the insights gained from the aforementioned classes. In particular, it will underscore the affinity that cultural anthropology shares with Digital Humanities methods. Finally, it concludes with a discussion of the future possibilities and challenges of incorporating digital humanities methods into cultural anthropology.

本レポートは、2023年7月3日から7月7日にかけてオックスフォード大学キーブルカレッジにて開催された、Digital Humanities at Oxford Summer Schoolの参加記である。私の専攻は文化人類学であるが、副専攻としてデジタルヒューマニティーズを学んでいる。私が本サマースクールに参加した目的は、文化人類学研究においてどのようにデジタルヒューマニティーズの方法を活用できるのかについて学ぶことであった。そのため、私は9つ設けられたコースのなかから、デジタル・ヒューマニティーズの理論や実践が幅広く取り上げられる Introduction to Digital Humanities を受講した。

本稿の前半では、Introduction to Digital Humanities の各セッションの内容を振り返る。そして後半では、私が本サマースクール受講を通じて感じた文化人類学研究におけるデジタルヒューマニティーズの可能性と課題について述べる。

それでは、ここから Introduction to Digital Humanities の各セッションの内容を振り返りたい。

1 Introduction to Digital Humanities の各セッションの内容

まず、初日の第 1 セッションでは、英国のナショナルコレクションの処理に用いられる Community Generated Digital Content (CGDC) の事例が取り上げられた。CGDC とは、公的機関ではないグループや個人によって制作・管理されたデジタルコレクションのことであり、個人のコレクションに由来するものからコミュニティによるデジタル化の取り組みや活動を通じて収集されたものまで、様々な形式の多種多様なデータを含んでいる。本講義のなかでは、CGDC の抱える課題として主に以下の 6 つが取り上げられた。①一般の人々がもつものに依存していること、②資源が限られているために一時的なデータ収集に終始してしまう傾向にあること、③データに関する情報が不完全なことが多いこと、④データの見つけにくさやアクセスのしにくさという問題を抱えるほか、コンピュータプログラムに問題が起きた場合の対処や更新が困難であること、⑤コンテンツが開発される際に長期的なアクセスの可能性についてあまり考慮されていないこと、⑥ローカルに管理されたウェブサイトが存在しており、引用が不十分で、ライセンスや所有権、著作権に関する記述がほとんどないことである。こうした特徴をもつ CGDC は、制作の段階から絶滅の危機にあるコンテンツであると言われている。その課題を乗り越えるために、英国のナショナルコレクション制作の現場では、CGDC を関連づけて検索することを可能にする取り組みが行われている。具体的には、英国のあらゆる規模の遺産組織やコミュニティが保有する CGDC を共有し関連づけ、データを見つけ出すための仕組みを構築し、コンテンツのアクセス・再利用・再構築を可能とする一般向けの場を生み出し、CGDC を作成・管理するための持続可能な道筋をつける作業が進められていた。

第 2 セッションでは、「デジタル・ヒューマニティーズの手法をどのように自分自身の研究分野に活かすことができるか」というテーマのもと、他大学の参加者と意見交換をした。参加者のなかには、「所属大学でデジタル・ヒューマニティーズの拠点を立ち上げるために、デジタル・ヒューマニティーズの方法について広く学びたい」という目的で受講している人もおり、参加者の様々な背景や興味関心について知ることができた。

第 3 セッションは、人文学研究にデジタルを活用することの意義やコンピュータの利便性に関する講義であった。コンピュータのコンコードダンス（書物や作品に使用されている主要な単語をアルファベット順に並べ、各単語のすべての用例とその直接的な文脈を記載すること）によって分析作業の効率性が飛躍的に向上したことは、人文科学分野におけるコン

ピュータの貢献であった。しかし、データの分析にコンピュータを活用する際には留意しなければならない点もある。それは、「コンピュータがそれぞれのデータの関係性を理解したり真理を予測したりする力をもたない」ことを理解する必要があるということである。あくまでコンピュータは人文学者の研究作業の負担を軽くする存在であり、データ同士の関係性や分析結果の解釈は研究者に委ねられているのである。

第4セッションでは、Remember Me の事例が紹介された。Remember Me とは、新型コロナウイルスによって亡くなった人々の追悼を目的としたウェブサイトである。例えば、親しかった人の慰霊碑をオンライン上で訪問したり、大切な人の追悼文を閲覧したり、残された人々が死者に向き合える場を提供している。このウェブサイトは、悲しみの言説がどのように社会政治的に形作られたのかということについて質的な分析を行うためにも運営されている。本事例から、新型コロナウイルスのパンデミックによって、追悼のデジタル化が進んだ状況を理解することができた。

2日目の第1セッションでは、The Publishing Trap というカードゲームを体験しながら、著作権のイメージについて議論した。そのなかで、研究のプロセスに関わる多くのものは著作権によって保護されており、実施したい活動が著作権法によって規制されているのかどうかを判断する必要があることを学んだ。

第2セッションは、リレーショナルデータベースの概要や活用方法に関するワークショップであった。このセッションを通じて、情報を構造化することで、必要なときに必要な情報を見つけることが可能になり、データを容易に評価し、比較し、分析することができるようになることを理解した。また、表形式で整理されたデータを、別の表形式のデータと関連づけたい場合に、リレーショナルデータベースの方法を活用することができることも学んだ。

第3セッションでは、デジタル学術編集 (digital scholarly editing) の方法論が紹介された。XML や TEI を用いて手書き文書をデジタル化する過程について、the Beckett Digital Manuscript Project の事例から学ぶことができた。

第4セッションは、他大学の参加者との関係づくりの時間であった。2分経過するごとに話す相手を変えていくスピード・ネットワーキングが行われ、短時間であったがそれぞれ異なる背景をもつ多様な分野の研究者と知り合うことができた。

3日目の第1セッションのテーマはデジタルアーカイブであった。本講義では、デジタル化とは何であり、どのような要素がその過程に含まれるのかについて学んだ。例えば、コレクションには、フォンド、シリーズ、ファイル、アイテムといった要素が階層的に含まれており、デジタル化は、注目されていない状態から、参照し、索引をつけ、説明し、デジタルイズ (アナログなモノをデジタル化) し、統合し、デジタルライズ (デジタルなモノを通じて行為を変革) するという過程を辿ることがわかった。また、アーカイブ処理は、コレクションを組織化し、カタログ化し、検索し、手元に届く過程があって利用につながっているという

ことを学んだ。

第2セッションでは、クラウドソーシングの考え方が紹介された。そのなかで、クラウドソーシングのタスクには「テキストの書き起こし」→「メタデータの強化、タグ付け、転写、記述」→「カテゴリー化、分類」→「OCR 検証」→「コンテンツ識別」といった5つの段階があることを理解した。

第3セッションは、コンピュータビジョンのツールや考え方に関する講義であった。IBMによると、コンピュータビジョンとは「コンピューターとシステムがデジタル画像、動画、その他の視覚データから意味のある情報を導き出し、その情報に基づいて対処し、推奨を行うことができるようにする人工知能 (AI) の分野のこと」⁽¹⁾である。実際に本セッションでは、コンピュータビジョンの方法が紹介され、ある画像のなかから対象物を選択して注釈をつけることで、対象物の追跡が可能になることを学んだ。また、対象物と一部が一致するデータは同一のものとして認識され取り出されるため、いくつかの画像を重ねたり交互に映したりして比較が容易になるという利点もあった。その一方で、メタデータを見つけられない場合や間違ったデータが取り出される場合もあることがわかった。

第4セッションでは、Oxford GLAM⁽²⁾ Digital Strategy を事例として、多数の人のオンラインコレクションへのアクセスを可能にする取り組みが紹介された。アナログの時代は、コレクションの内容を熟知したスタッフの記憶を頼りにコレクションが構築されていたが、デジタル化が進んだことで、組織全体のスタッフがコレクションの構築に関わることが可能になった。また、デジタル化によってコレクションの管理やセキュリティの維持、廃棄の検討もより容易になったことがわかった。

4日目の第1セッションでは、デジタルアッシリア学のアプローチが紹介された。現存する最古の文字である楔形文字は、5500年ほど前に南イラクの湿地帯に暮らしていたメソポタミアの人々によって発明されたものであり、実用的な記録や公的な文書、学術的なテキスト、文学的な物語が粘土や銘板、円筒印章などの表面に彫刻されている。それらの貴重な文化的遺物のデジタル化にあたっては、ATFのフォーマットを用いたテキストエンコーディングや、TEIによる言語的な注釈づけ、AIによるモチーフの認識などが行われていた。

第2セッションでは、人文科学分野の研究に用いられている分析ツールの例としてJupyter Notebook、Ngrams、Voyantの3つが取り上げられた。本セッションの演習で実際にそれらのツールを利用したことで、各ツールの特徴を学ぶことができた。

第3セッションでは、プログラミングのプラットフォームであるGitHubを体験し、人文科学分野においてどのように活用可能かを議論した。設定を記述し、データやソフトウェアを保存しておくプラットフォームがあることで、現在に限らず未来においても引き続きデータを活用することができることを学んだ。

第4セッションは、UK-Ireland Digital Humanities Associationの事例紹介であった。UK-Ireland Digital Humanities Associationは、英国とアイルランドのデジタル・ヒュー

マニティーズの分野における協働のためのネットワークとして立ち上げられた組織である。本講義を通じて、ネットワーク化することの価値や、UK-Ireland Digital Humanities Association の組織化の過程とこれまでの活動について学ぶことができた。

最終日の第1セッションは、ボドリアン図書館のデジタルコレクションの構築に関する講義であった。多くのデジタルコレクションは、デジタル化プロジェクトの資金や助成金の提供を受けて構築されており、それによって生じている課題もあった。例えば、中核的なサービスと研究者が率いるプロジェクト間の対立についての課題、将来の技術のアップグレードに関わる課題、システムの安全性やバグに関する課題などである。それらの課題を乗り越えるために、ボドリアン図書館では、持続的なプラットフォームを通じた更新を行い、多くの人のアクセスを可能にし、ユーザーの期待に沿った改良を重ねながら、デジタルコレクションの構築を進めていた。

第2セッションでは、“印刷版の複製としてのデジタル”と“デジタル版”の関係性について学んだ。また、Electronic Enlightenment⁽³⁾というプロジェクトにおいて行われている歴史的文書のデジタル化の方法やメタデータの構成要素についても知ることができた。

第3セッションは、Introduction to Digital Humanities の振り返り会であった。本サマースクール参加中の思い出をそれぞれの参加者が絵に描き、参加者全員で共有した。

最終セッションでは、クリティカルテクノロジーの議論が取り上げられた。クリティカルテクノロジーとは、文化団体がどのようにテクノロジーと批判的に関わるかを検討するための理論的枠組みである。美術館や博物館がクリティカルテクノロジーの議論において貴重なプラットフォームを提供することが示されたほか、博物館におけるAIの活用について、倫理的な意味を探求し、批評し、理解する重要性が高まっていることを学んだ。

2 文化人類学研究におけるデジタルヒューマニティーズの可能性と課題

以上のセッションへの参加を通じて、私自身の研究に活用できるのではないかと感じた方法はCGDCである。私の専攻している文化人類学の分野では、特に映像人類学の領域でデジタルの活用が進んできている。そのため、フィールドの人々とともに映画やウェブサイト等を制作する映像人類学の方法とCGDCは親和性が高いように感じられた。また、実際に沖縄県南城市で行われている「なんじょうデジタルアーカイブ」の取り組みでは、地元住民から提供された写真をデジタル化することによって、それらの写真に対する人々の語りを引き出している⁽⁴⁾。このように、画像や映像、音声といったデータを、対象者の語りを引き出す手法として、自身のフィールド調査に活かしていくことができればよいと考えた。

また、今回のサマースクールで学んだツールのなかでは、特にVoyantが面接聞き取り調査のデータ分析などにおいて活用できそうだと感じた。文化人類学研究においては、参与観察と並んで面接聞き取り調査が頻繁に行われる。聞き取り調査によって得られた録音データは分析にあたって文字起こしされるが、そうした文字化されたデータをVoyantに入力す

ることで、話し手の語りにあられる言葉の特徴を可視化し、語りのなかにある重要なキーワードを浮かびあがらせることができるのではないかと考えた。

最後に、本サマースクールへの参加を通じて考えた、文化人類学分野におけるデジタル・ヒューマニティーズの可能性と課題について述べたい。

これまでの文化人類学研究によって、人類学者が明らかにしてきた人々についての情報は、主に文字データとして民族誌にまとめられてきた。しかし、文字だけでは伝えられない部分が多く存在することは、民族誌の記述の課題となっている。そこで、写真や映像、音声などの視覚・聴覚的なデータを積極的に活用し、その場の状況を記録していくことで、文字だけでは捉えきれない部分も含めたその場の全体像を伝えることが可能になるのではないかと考えられる。また、これまで蓄積されてきた世界の人々に関する様々な情報をまとめたデータベースを作成することができたら面白いのではないかと考える。例えば、リレーショナルデータベースの手法を使って情報を整理し、ある地域の人々の生活様式や特徴を地図に落とし込むことができれば、世界のどこにどのような人々がいて、どのような生活をしているのかを視覚的に捉えることができるだろう。

しかし、文化人類学の立場でデジタルコレクションやデータベースを構築することには難しさもある。その難しさというのは、これまで文化人類学分野の研究者は、文脈のなかにあるものをそこから切り離さず、複雑なままの状態を記述しようと試みてきたのであるが、情報をデジタル化し集約するためには、対象を線引きし、整理し、階層化するといった作業が必要となり、その作業のなかでこぼれ落ちてしまう部分や見えなくなってしまう部分も多くあるだろう。対象を線引きし、整理し、階層化する過程を経て作られたデジタルコレクションは、結果的に「様々なものが複雑に絡み合った現実を捉える」という文化人類学の目的にそぐわないものになってしまうかもしれない。

このように、文脈のなかにある情報をどのようにデジタル化していくのかという点は、文化人類学の分野にデジタル・ヒューマニティーズの方法を取り入れていくうえで検討すべき課題であるだろう。それについて、D' Ignazio, C. と Klein, L. F. は、Haraway, D. のフェミニスト理論を引き合いに出し、以下のように述べている。「知識が社会的、文化的、物質的な文脈のなかにあることを前提とし、多様な文脈がデータの可視化にどのような影響を与える可能性があり、データの可視化によってそれがどのように受け取られうるのかを考慮する必要がある」⁽⁵⁾。

今回のサマースクールを通じて考えた以上の点について、今後の自身のフィールドワークやデータの分析に活かすとともに、文化人類学分野におけるデジタル・ヒューマニティーズの可能性についてさらに考えていきたい。

注

- (1) IBM 「コンピュータービジョンとは」
<https://www.ibm.com/jp-ja/topics/computer-vision>
2023年7月23日閲覧.
- (2) GLAMとは、Gallery, Library, Archives, and Museumの略称である。
- (3) Electronic Enlightenmentとは、近世の書簡に関するオンラインコレクションである。
本プロジェクトでは、文通相手に関わる情報や地理的詳細などの情報を書簡と結びつける作業が行われた。
- (4) 小風尚樹 2023. 「《連載》「デジタル・ヒストリーの小部屋」第17回 コミュニティによって生成されたデジタル・コンテンツ (CGDC) とデジタル・パブリック・ヒストリー：沖縄県南城市の取り組みをうけて」『人文情報学月報』143.
<https://www.dhii.jp/DHM/dhm143-2>
2023年8月28日閲覧.
- (5) D' Ignazio, C. & Klein, L. F. 2016. Feminist Data Visualization
https://www.academia.edu/28173807/Feminist_Data_Visualization
2023年8月28日閲覧.

(ささもと みわ 千葉大学大学院人文公共学府博士前期課程)

DH サマースクールで獲得した新たな視点 ——歴史研究者としての私がデジタルと向き合うということ——

New perspectives gained at the DHOxSS: What it means
for me as a historian to face the digital realm

若林 芽依
WAKABAYASHI, Mei

Abstract

This paper reports on my experiences and learning following my attendance the Digital Humanities at Oxford Summer School 2023 (DHOxSS 2023) held in July. I selected the class ‘Introduction to Digital Humanities’ and engaged in interdisciplinary discussions with other participants, with ‘digital’ as the common ground.

In historiography, the issue of inequality among historical sources is a problem, mainly because only historical sources that have been previously digitised are further digitised. The choice of historical sources to be digitised is related to their degree of deterioration, funding sources, and national considerations. Historians who use digitised sources and publish the results created in the above context may be seen as complicit in the vicious circle of inequality created by digitisation. Before utilising digitised sources, we, as historians, must be cognizant of the digitization process, besides examining the nature of the historical sources.

My experience at this summer school has also changed my approach to my career. Initially, my focus was on becoming a faculty member, but now I have the option of pursuing a career as a museum curator. As a profession, it combines my expertise with educational activities and has the potential to make traditional activities more engaging through digital humanities. This learning has influenced not only my research methods but also my vision for the future.

1 はじめに

2023年7月3日から7日までの計五日間、私はDigital Humanities at Oxford Summer School 2023(DHOxSS)への参加のため、オックスフォード大学キーブル・カレッジを訪問した。本レポートは、このサマースクールでの学びを報告するものである。

以下では最初に、私が選択したコースの概要と、中でも特に興味深かった授業について説明する。次に、サマースクールでの経験を今後の自分自身の研究やキャリアの視点から振り返る。ここでは、Digital Humanities(以下、DHと略記)と人文学、歴史研究者として

の私の中で生じるであろう、相互作用にも言及したい。

2 DH 入門コースの概要と授業紹介

2.1 1日目：「非公式」な存在へ手を差し伸べる“CGDC”

全9コースのうち私は Introduction to Digital Humanities という名の、理論や実践など、DH について幅広く扱うコースに参加した。入門編にあたるため講義中心であったが、DH 関連のツールやソフトウェアを使用した演習も実施された。いくつかの授業を紹介したい。

一日目は全コース共通して基調講演から始まり、二時限目以降から各コースに分かれて授業が開始された。基調講演では、グラスゴー大学の Lorna Hughes が、CGDC (Community Generated Digital Content) の取り組みについて説明した。前提として、近年の大規模な史資料のデジタル化は、「公式な」遺産や歴史を生み出すと同時に、コミュニティレベルの小さな史資料を公式の外へと追いやったという。デジタル化する史資料の選定は、資料保存の観点からその劣化の程度に基づいて判断される⁽¹⁾ほか、利用頻度が多いと予想されるものほど優先される。加えて資金提供源や、ナショナル・アイデンティティを考慮した国の影響を受ける⁽²⁾場合もある。このような背景から少数派となる小さな史資料のデジタル化は見逃され、非公式な存在となっているのである。

これに対する動きが CGDC であり、小さなコミュニティで生成されたデジタルコンテンツを意味する。コミュニティ主導で史資料のデジタル化が行われるため、平等であることを目指したデジタル化といえる。だが正式な機関を除いた、個人やグループ所有の小規模なコレクションであるが故に、メタデータ(データに関するデータ)が不足しており、かつ、デジタル化した史資料へのアクセスがローカルに限られている点が課題となっている。課題解決のため、グラスゴー大学は専門知識を有する13の機関⁽³⁾と連携し、情報の正確性やプライバシー、権利に留意しつつ、CGDC の生成及びそれらの空間・時間を超えたナショナル・コレクション化を推進している。

デジタル化資料の選定方法と選定結果が人々の認識に与える影響については、基調講演に限らず多くの授業で触れられている印象があった。利用者の多い史資料のデジタル化が進められる中で、それら多数派の史資料やそれに関連した事象の「公式な」歴史化に拍車をかける主体の大部分は、市民以上に、デジタル化資料を利用しそこから得られた成果を発信する研究者だと考えられる。これについては後に詳述するが、研究者はデジタル化された史資料を利用する際に、史資料自体が作成された時代の背景だけでなく、デジタル化に至った経緯にも注意して研究を行う必要があるだろう⁽⁴⁾。

二時限目では、DH の大枠を把握した。デジタル技術を人文学研究に応用する DH には、文学や言語学、歴史学、考古学、哲学、音楽学、博物館学などの多様な学問領域が含まれており、他の参加者との交流を通じて DH が扱う範囲の広さを実感した。DH の課題としては、デ

デジタルデータを保存するためのストレージや、前述のようなデータへのアクセスのしやすさ、倫理や著作権の問題、そして技術継承の問題が挙げられていた。

2.2 2日目：活用されるデータベースにするための工夫

二日目は、二時限目のリレーショナルデータベースに関する授業が興味深かった。必要なデータを瞬時に引き出し、評価、比較、分析に用いるためにはデータの構造化が必須であることを確認した上で、構造化したデータ同士を紐づけたい際は、リレーショナルデータベースが有効であることを学んだ。

データを構造化するにあたり、一人の人物を指すにもかかわらず名前の表記が複数存在する場合や、反対に同名異人である場合がある。その際には、生没年といった新たなデータを追加して判別可能にする必要があるが、データを増加、細分化し過ぎてもデータベース利用者の混乱を招く恐れがあると知った。また人文学データベース特有の課題として、断片的で不完全なデータの在り方や、各データ解釈の確実性の程度の違い、経年による用語の変化などがある。これらについてもデータの細分化が対応策として考えられるが、同時にデータベースを複雑化させてしまうだろう。データベース利用者の意見を取り入れながらの定期的な改善が大切だと思われる。

2.3 3日目：私たちの記憶を左右するアーカイブと支配者

三日目については、一、二、四時限目の授業を紹介したい。一時限目では、アーカイブにまつわる問いを考えた。とりわけ、アーカイブと支配者の関係に関するものが印象深かった。人々が多くの部分で共通点を有しているものが国家であり、何かを忘却する際もみな同じなのだという。そして現代の記憶は、即時の記録や画像の可視性からアーカイブに依存しているという。アーカイブの作成は、史資料の収集、組織化、目録作成、検索および修正、(公開、)利用の過程を踏む。ここで、アーカイブ作成時に収集する史資料の選定が、人々の記憶に影響を及ぼす構図が確認できる。これは前述の基調講演におけるデジタル化資料の選定が置かれた状況と類似しているといえよう。デジタル化されない、アーカイブに含まれないことで、実際には存在する史資料が発見及び利用される機会を奪い、そのような史資料は当初から存在していなかったかのような扱いを受けるのである。

史資料の選定には前述のような資金提供源や国といった権力が働く場合もある。しかし実際に選定作業を行うのは研究者が大半である。授業では、「私たちは何を覚え、何を忘れるべきなのか」が問われた。ここではその具体例を考える以上に、デジタル化やアーカイブ作成を行う際は、自らの行動が他者の記憶に与える影響を意識し、責任を持つ必要があると感じた。

二時限目では、人文学におけるクラウドソーシングが取り上げられた。デジタル技術が人間に与えた意義には、かつては少数の権力者が独占していた文化的財に一般の人々もアク

セスできるようになった点や、アナログ時代から続く作業を新たな手法で実施可能にした点がある。後者の例には、クラウドソーシングを活用した大規模でのオンライン百科事典の作成が挙げられた。人文学でのクラウドソーシングの作業は五つに大別されており、(1)テキストの転写、(2)メタデータの強化(タグ付け、書き換え、説明)、(3)カテゴリー化、分類、(4)OCR(光学文字認識:画像内テキストをデジタルデータに変換すること)の検証、(5)コンテンツの識別が行われている。市民科学を支援するポータルサイトとしては Zooniverse が紹介され、非専門家が主導する研究活動も増加していることを把握した。

四時限目は、オックスフォード大学自然史博物館の方とともにオンラインコレクションの強化について考える内容だった。同館では Collections Online と呼ばれるプラットフォームが開設されているが、利用者数増加を図るためにはどのような取り組みが必要か、議論がなされた。同館関係者からは、デジタル化資料の数を増やす、他サイトと連携した統合サイトで同館のデータを利用できるようにする、ソーシャルメディアを使用して広報を行うなどの案が提示された。この点からは、データにアクセス可能な環境を構築しただけでは不十分であり、人々に利用されるための工夫が必須であることに気付いた。

2.4 4日目:各学問分野がDHとともに生み出す個性

四日目は、AI時代における古代楔形文字の研究(デジタルアッシリア学)を取り上げた、一時限目の授業に興味を惹かれた。アッシリア学では1970年代から史資料のデジタル化が進められており、写真、3Dデータ、線画といった画像に加え、機械学習を活用したOCRや翻訳及び意味解釈など、多方面からの分析がなされている。また将来的にはAIによるモチーフ分類の自動化(画像の注釈付け、アノテーション)も行うようである。楔形文字は粘土板や円筒印章といった立体物に刻まれている。立体物からテキストデータを得るための高度な画像処理技術が、現在の多角的な視点からの分析を実現させており、デジタルアッシリア学特有のDHの発展なのだと学んだ。

五日目の二時限目には、書簡のオンラインコレクションを作成している Electronic Enlightenment プロジェクトの方の指導のもと、デジタル版の歴史的書簡からデータを抽出した。リレーショナルデータベースの授業でも指摘された、時間場所の記述方法の違い、経年による変化はここでも課題となっており、データの標準化が進められていた。加えて、プロジェクト独自のデータの曖昧さ回避のプロセスとして、プロジェクト所有の書簡と個人を照合し、書簡での登場数から階層や知名度を割り出す方法が取られていることを理解した。

3 DHサマースクールでの経験が私に与えた視点

3.1 研究やキャリアについて

ここからは、今回のサマースクールの経験をどのように自分自身の研究やキャリアに活

かすのかについて示していきたい。繰り返し述べてきたが、史資料のデジタル化を始めとした DH の営みの背景には様々な思惑があり、活動が平等に実施されているとは言い難い節があるのだと気付かされた。デジタル化資料を歴史研究者が利用して成果を発信することで、元来注目されていた史資料に更に注目が集まり、不平等の再生産を生じさせている。そのため、アーカイブを利用するには、アーカイブが「公式な」歴史を多く含むものであり、歴史的事象を網羅するものではない点を念頭に置く必要があるだろう。自分でデジタル化や分類、アーカイブの作成を行う際にも、無意識のうちにバイアスがかかってしまう点に注意したい。

キャリアについては、これまでは研究者の中でもとりわけ大学教員を志してきたが、他の選択肢も視野に入れるようになった。サマースクールには学生、大学教員のほかに、イギリス国立公文書館のアーキビストや博物館学芸員なども参加していた。全員が自分の専門領域を持っている点では共通していたものの、学校以外の職業を選択している者も一定数いたのである。以前から私は、自分の専門である西洋史と教育を組み合わせた職業に関心があり、その点から大学教員を志望してきた。実際に、専門性を高め、教育に活かす方法を体得するために、学部時代に学芸員や教員免許状を取得し、大学教員に必要だと思われる力も養ってきた。だが周知のように、学芸員も調査研究や教育普及活動を行う。加えて、オックスフォード大学自然史博物館のオンラインコレクションの事例からも分かるように、博物館活動に DH、ひいてはデジタル技術の知識は不可欠である。オンラインコレクションの作成及び公開は、劣化の危険から展示が困難な資料を、負荷をかけることなく公開することもできる。今後は、自分の専門と教育を掛け合わせた職業だけでなく、DH を用いることで、それまでの活動が深化し、より魅力的になる職業を考えていきたい。既に DH を取り入れている職業に限らず、新たな場での DH を活用した取り組みも行えるだろう。

3.2 DH と人文学と人

最後に、DH と従来の人文学、歴史研究者としての私における相互作用について言及する。まず、サマースクールを通じて DH とは、人と人とをつなぐ営みであるように感じた。一つ目のつながりは、研究者間の専門領域を超えた学際的なつながりである。DH を共通点としながらも、研究対象へのアプローチ方法は領域によって異なるため、参加者との意見交換の中で新たな視点を獲得するのである。そして二つ目は、研究者と市民、市民間でのつながりである。アーカイブやクラウドソーシングといったデジタル技術により、研究が市民にとって身近なものとなり、更には市民だけでも研究が行われるようになった。しかし、即座にデジタル技術を扱える時代であるために、歴史学における「公式な」歴史のような不平等とその再生産は生じやすいであろう。それ故、適切に対処するためにも DH の専門家は必要となる。

DH は、人文学を市民にとって身近なものに変革したうえ、CGDC のような「公式な」歴史

に対抗する活動をも可能にした。CGDC は現時点では草の根的な活動に留まる。だが、DH の発展とともに各地で類似した活動が展開された際には、歴史認識や歴史研究の在り方にも影響を与えるであろう。

4 おわりに

以上、サマースクールでの学びについて述べてきた。研究者本人による DH 研究紹介を通じて、DH に対する解像度を高め、自分の研究への応用を具体的に想像することができた。また、サマースクール参加者との交流は己の将来について見つめ直す機会となった。今回得られた知見を研究のみならず、普段の生活にも活かしていきたい。

注

- (1) Gerben Zaagsma, “Digital History and the Politics of Digitization”, *Digital Scholarship in the Humanities*, vol. 38, 2023, pp. 830-851. <https://doi.org/10.1093/llc/fqac050>
- (2) 小風尚樹《デジタル・ヒストリーの小部屋》連載第 17 回「コミュニティによって生成されたデジタルコンテンツ (CGDC) とデジタル・パブリック・ヒストリー：沖縄県南城市の取り組みをうけて」『人文情報学月報』143 号、2023 年。
- (3) The National Archives, University of Manchester, National Library of Scotland, National Library of Wales, Public Record Office of Northern Ireland, Tate, Association for Learning Technology, Digital Preservation Coalition, Software Sustainability Institute, Archives+, Dictionaries of the Scots Language, National Lottery Heritage Fund, Wikimedia UK のことである。
- (4) 既に、デジタル化史資料を批判的に考える (いわゆる、デジタル史料批判) プロジェクトとしてルクセンブルク大学 C2DH による Ranke.2 がある。“PROJECTS,” Ranke.2, <http://www.c2dh.uni.lu/projects/ranke2-teaching-platform-digital-source-criticism> (最終閲覧日：2024 年 3 月 6 日)

(わかばやし めい 千葉大学大学院人文公共学府博士前期課程)

アーカイブの問題とその虚構的な側面についての若干の考察

The essay on archival issues and fictional aspects that accompany them

井上 颯樹

INOUE, Satsuki

Abstract

This paper provides an overview of the activities conducted during “The Digital Humanities at Oxford Summer School 2023.” held in Oxford University. Following this event, I noticed that in the field of Digital Humanities (DH), there are certain concerns about fictional objects and interest in semantics. Although there is a specific research field that bridges philosophy and DH, I attempt to highlight some problems inherent in DH research from a philosophical perspective. In particular, I argue that in discussing fictional objects, we are assuming a certain contradiction. The paradox lies in our understanding that although fictional objects lack existence and meaning, we can engage in meaningful discourse regarding the same objects.

はじめに

以下では、卓越大学院プログラムの一環として行われたオックスフォード Digital Humanities⁽¹⁾（以下 DH）サマースクールにおける活動報告について示す。

本報告は三部構成になっている。第一部では、サマースクールにおける全5日間の授業の活動報告を行う。第二部では、サマースクールを通じて報告者が感じた疑問点を列挙する。第三部では、今回のサマースクールがどのように報告者の今後の研究活動に影響を及ぼしうるか、という点について言及する。

1 第一部

第一部では、サマースクールにおける五日間の授業の報告を行う。

まず、プログラム内容について説明する。報告者が参加したプログラムは、“when archives become digital” というプログラムであった。当プログラムの目的は、archive〈文書⁽²⁾〉をデジタル化するとき、何が起こっているのか、ということを探求するものであった。

ついで、本プログラムの講義形態について説明する。講義は、五日間を通して、一つの教室で行われた。講義形態は、座学を主とすることはなく、特定の話題に関する議論を中心と

していた。そのため、講義のためのテキストは存在しなかった。だが、他方で、Omeka S というデジタルコンテンツの管理システムを実際に用いるという講義があった⁽³⁾。

クラス編成は、報告者を含めて13人であった。クラス担任の講師が一人。そして、四人の外部講師を迎えていた。発表者以外の受講者は英語を母語としていた。

具体的に講義内容を紹介する。1日目は、archive〈文書〉についての議論を中心としていた。具体的には、archiveが持つ関係性についての議論が盛んに行われた。archiveが持つ関係性として、物語性、対象性、想像可能性が挙げられた。例えば、archiveが持つこれらの特徴を示してくれるものとして、伝記をあげることができる。伝記には、誰がどこでどのようなことをした、というような物語性が存在する。加えて、特定の時代の特定の人と言ったような対象性や、その伝記を読んだものがさまざまな可能性を想起できるという想像可能性も持ち合わせている。以上のことから、最終的に、これらの関係性は総じてarchiveが持つ能力とあってよい、と結論づけられた。

また、興味深い概念として、「文書に関する権力」“power of archive”という概念が挙げられた。この権力とは、archiveに影響を与えるための権力である。そしてこの権力は、その文書を記述することができる唯一の人間である archivist だけが持つことができるものであるとされた。なぜ、archivist だけがこの権力を持つことができるのか。それは、繰り返すにはなるが、講義の担当者によると、〈文書〉に影響を与えることができるのは、archivist のみであるからである。以上のことから、archivist は正しいリテラシーのもので、自らの権力を行使するべきであるということが結論づけられた。

次に行われた議論は、library と collection の差異に関するものである。この二つの差異を設けるために、「公的であること」と「私的であること」という二つの区分が導入された。クラス内での議論によると、library は公的である一方で、collection は私的であるという。なぜかという、library では、すでに出版されているものが扱われるが、collection においては、すでに出版されているものだけを扱うわけではないからだ。この区別に従うことで、library は公的なものとして、collection は私的として大別されることになる。

2日目では、どのようにして archive にたどり着くか、ということについての議論がなされた。以上の議論を明瞭なものにする補助線として、Scope と Access という概念が導入された。Scope とは、知りたい範囲を決める行為である。Access とは、どのような手順で知りたいデータにたどり着くかを示すものである。Access には三つの方法が存在する。一つ目は、Public な方法である。二つ目は、Private な方法である。三つ目は、一つ目と二つ目の手法をミックスしたものである。一つ目と二つ目の方法は、上述した「公的であること」と「私的であること」に関する議論と結びついている。というのも、Public な方法とは図書館などを用いる方法であり、Private な方法とは、個人的な収集活動における方法であるからだ。これは、例えばメールや Omeka での共有のことである。要するに、データ記録として公共的に残る方法において、個人での私的な取引を完遂する、ということである。以上の方

法が提案されたのちに、三つ目の手法を有効活用することが最善策であることが示唆されていた。

3日目では、データの価値についての議論を行った。主要な意見として、データはリマインド機能を持つため価値を持つ、ということが挙げられた。ここで興味深い点は、データがフィクションであるか、ノンフィクションであるかは問わない、という点である。つまり、映画等はそれ自体で、ある人にとっては、archiveとして価値を持つのである。つまり虚構にしる、そうでないにしる、ある仕様の生活様式や文化などを保存しているものは、データとして価値を持つのだ。

以上の議論はとても興味深いものであった。なぜかという、虚構を理解し価値を置くためには、現実には存在しないような対象を認めるというある種の矛盾を受け入れることになるからだ。しかし、虚構的な対象を認めるかどうか、という哲学的な議論は本報告の埒外にある。しかしながら、依然として報告者が興味深いと感じた、人々は直観的に虚構やフィクションの矛盾を受け入れつつもその存在に価値を置くことがあるということについては以下で詳しく述べておく必要があるだろう。

以上の議論を具体例によって説明してみようと思う。3日目の講義において重要なことは、データの価値において、そのデータの実在性は関係がないというものだった。例えば、我々は、「空飛ぶトナカイを連れたサンタがクリスマスに自分の街にやってくる」とは考えない。その理由の一つに、そのような対象は実在性を持たないからだ、という説明を挙げることができる。だが、他方で、空飛ぶトナカイを連れたサンタに関する情報は価値があるように思われる。我々はそのような存在を信じることはないが、自らの子供にサンタに関する情報を有意義に語っていることがある。

存在しないものに価値を見出すということはどういうことであるのか。我々は日常的に、「クリスマスにサンタが来ることなど信じていても意味がない」や「一角獣の生態についての議論は価値がない」⁽⁴⁾というような語りをする。しかし、3日目の議論を再構成すると、サンタについての議論には価値を感じないとする一方で、サンタという対象に与えられている情報-空飛ぶトナカイを連れ、クリスマスの日、自分が住む街にやってくること-には価値を置いている。つまり、そのような対象は存在せず、無意味であるということを知った上で、同じ対象が持つ情報については有意義に語ることが、3日目の議論では成立していた。以上のようなある対象に関する矛盾を引き受けた上で、有意義な議論が成立するという瞬間は、非常に興味深いものであった。

4日目では、最も良いArchiveの仕方に関する議論が行われた。そこでは、最も良い機械の学習方法とは何か、という観点を踏まえた議論が展開された。

まず取り上げられた方法は、コンピューターの理解能力を向上させるというものだった。しかし、どのようにしてこのような能力を向上させるのか。人間と機械の技能習得の仕方は明確に異なっている。それゆえ、この提案は進展がないものとなった。

代わりに取り上げられた方法は、あらゆる物理的な対象“physical object”をデジタル化された対象にするというものだった。この手法は、機械の負荷を下げるという点においても、有用なやり方である。というのも、この手法は、コンピューターから、物理的対象を学習させ、リスト化し、整理するというタスクを取り除くことができるからだ。あらゆるものがデジタル化された場合、大きなリストは一元化され、我々は、コンピューターの学習についてよりクリアに考えることができるであろう。しかし、archiveのデジタル一元論は、メタデータの観点から多くの問題を内包しているように思われた。その疑問点については第二部で明らかにする予定である。

最終日である5日目には、オックスフォード大学の哲学科に在学する博士課程の学生による発表を聴講した。発表内容は、DH 研究とフェミニズムというテーマであった。発表の結論は、データによる帰結主義に反論するというものであった。我々はデータをもとにして、自分たちの議論に結論を加えることがある。だが、データだけではなく、メタデータにも注目すると、失われている少数派の記録が存在している、ということがわかる、というものだった。それにもかかわらず、我々は、依然として、データのみを繋げて知識や記録を構成している。これは歴史修正的であり、ある対象のデジタル化に伴う倫理的な問題が顕在化した一例である、という主張もなされた。発表者によると、データに基づく知識や構造は相対的なものである。つまり、対象だけではなく、対象の周りを“Design”（指示する）することで、知識やデータは構成されるべきである、というものだ。例えば、AはBによって引き起こされたという歴史的データは、BがAを引き起こしたと記述することも可能である。さらにいうと、AとBのメタデータに着目すると、ある人の観点からはBのメタデータの方が重要性の高い場合が存在する。その場合に、AはBによって引き起こされたと語ることは、相対的な記述ではない。このように、単にAとBの可視化された関係だけではなく、その関係に面的には現れないような不可視な情報をどのように扱うか、という点にまでDH研究者は向き合うべきである、という発表だった。

2 第二部

第二部では、サマースクールにおいて報告者が感じた疑問が提示される。この疑問は、報告者の哲学的な関心に由来するものである。その関心は、DH 分野における意味論的な観点に由来するものである。

一般的に意味論とは、文における内容の表現として説明される⁽⁵⁾。例えば、「カモノハシは卵生である」という文は、当然に思われるかもしれないが、カモノハシが卵生であることを表現（意味）している。このほかにも、少し捻った意味論の問題として、〈明けの明星〉と〈宵の明星〉は、どちらも〈金星〉表現しているが、〈明け方の金星〉と〈日没後の金星〉といった、別の意味を示しているという有名な問題がある⁽⁶⁾。

さて、ここで問題にしたいことは、サマースクールにおいても同様の意味に関する問題が

提起されていたということである。スクールにおいて、報告者が抱いた懸念は、A というデータが所有するメタデータは無数に存在しうるか、という形で提起された。例えば、ある歴史上のデータに対して、〈ヴィクトリア女王〉とメタデータを付け加えることと、〈ヴィクトリア姫〉というメタデータを付け加えることに差異はあるのか、という問題が考えられた。確かに、〈ヴィクトリア女王〉と〈ヴィクトリア姫〉は現実世界において、同一の人物を指示する。しかし、この二つの表現は意味において異なっている。このような問題が存在するということがスクール内において示されたが、そのような問題に対する解決策は提案されることはなかった。

そして帰国後、報告者はこの問題について考えてみた。そこでは、メタデータを適切に付与していくことは人間の作業になるのではないか、という見解にたどり着いた。つまり、コンピューターが上記の問題に対して適切な解決策を見出せていないという事実を鑑みれば、ある文書に登場する〈ナポレオン〉という人物に関するメタデータを〈ワーテルローの勝者〉として記述するか、〈トラファルガーの敗者〉として記述するか、という問題において、コンピューターではなく、人間が、状況に合わせて〈ワーテルローの勝者〉と〈トラファルガーの敗者〉というメタデータを〈ナポレオン〉に付与する必要がある、ということである。しかしながら、以上の問いは依然として問題のままである。というのも、その文章の文脈に沿って、適切なメタデータをどのようにして対象に与えていくべきかという問いに、今回のサマースクールでは答えが出なかったからである。しかしながら、以上の問題に対して、コンピューターではなく、人間が処理を行うということになると、文章をデジタル化する際の恣意性や、特定のデータが埋もれてしまう可能性など、最終日に集中的に行われた議論で指摘された同様の問題点に立ち戻ることになってしまう。以上のような問題に対して、コンピューターは現状のところ、どこまで我々の背景を踏まえた判断を行うことができるのだろうか。以上のことについての関心が、今回のサマースクールの参加を通じてさらに高まった。

3 第三部

第三部では、今回のサマースクールが今後の研究にどのように寄与するか、ということを説明する。

まず、哲学研究者として、私は今回のサマースクールにおいて、人的そして方法論的な学びを得ることができた。とりわけ、クラスメイトに同じ哲学研究者がいたことは、報告者のサマースクール期間の活動だけではなく、今後の研究人生においても大きなことであった。クラスメイトは、ヴィトゲンシュタイン研究者であり、ヴィトゲンシュタインと同時期に活躍した英米圏の哲学者を研究している報告者は、彼との議論を通じて、自分の関心をより深めることができた。クラスメイトの論文は、DH と哲学を結びつける著作として、大いに影響力を持つものであった⁽⁷⁾。なかでも、記号言語と日常言語の対比を軸に、コンピューターサイエンスについて議論をしていることは、報告者が今後 DH 研究を日本で行う上での大き

な指針となった。

他方で、準備不足であった点として、報告者は英語での研究成果物を持っていなかった、という点が挙げられる。そのため、報告者はどのような研究をしているということが相手に伝わりにくい状況でサマースクールを過ごすことになった。このことは、卓越した研究者を目指す報告者として、日本語だけではなく、英語の運用能力を高める必要があることを自覚させてくれるものであった。

さいごに、今回のサマースクールは、哲学研究者として更なる進歩を決意するための大きな契機であった。それに加えて、自分の哲学的な関心がきちんと DH 研究に応用されるべきであり、有用性を示すことができるのではないかと、という仮説を得ることもできた。五日間という期間ではあったが、今回のサマースクールは、報告者を新たな問いへと向き合わせてくれる非常に貴重な時間であった⁽⁸⁾。

注

- (1) DH という語を本報告が明確には定義することはない。以下の報告において、DH という語で意味されていることは、人文学において拡張された学問領域ではなく、何らかの一つの学問領域ということである。というのも、(小風, 2021) も論じるように、「DH とは何か」という問いに答えること自体が極めて難解な問いであるからだ (cf. 小風, 2021:25-27)。それゆえ、上記の問いに答える機会は別の機会とさせていただきたい。
- (2) 「archive」を「文書」と訳したこと、ひいては「文書」という言葉で意味されていることについて、本報告は (古賀, 2008) の説明に依拠している。
- (3) <https://omeka.org/s/download/#sandbox>
- (4) 柏端 (2017) によると、このような語り方がむしろ、架空の対象を呼ぶものにとって本質的な語りである。例えば、「クリスマスの日にサンタが街にやってくる」という発言には、二種類の否定の仕方が存在する。一つ目は「サンタが街に来るのは、クリスマスイブだ」という否定である。二つ目は、「そもそも、サンタはいないし、空飛ぶトナカイもない」という否定である。一つ目の否定は、サンタについての話を内側から否定している。他方で、二つ目の話はサンタを外側から否定している。以上の二面的な対応が取れることに、架空の対象に対する本質的な態度が存している。
- (5) Jeff, Speaks. “Theories of Meaning”, Stanford Encyclopedia of Philosophy URL = <https://plato.stanford.edu/entries/meaning/> (最終閲覧: 2023/07/20)
- (6) cf. (飯田, 2022: 85)
- (7) <http://wittgenstein.herokuapp.com/#turing> (最終閲覧日 2023/07/20)
- (8) このような恵まれた機会を報告者に与えてくださった本学卓越大学院担当の先生方に感謝申し上げます。そして、今回のサマースクールへの参加が確定して以来、DH における基礎的な素養を教えていただき、さらには現地にも同伴していただいた本学の小風

尚樹先生にも感謝申し上げます。また本報告をより伝わりやすいものへと導くために、非常に示唆的かつ、明晰なコメントをいくつもくださった査読者の方にも感謝したい。

参考文献

- 飯田隆, 2022, 『増補改訂版 言語哲学大全 I』, 勁草書房.
- 柏端達也, 2017, 『現代形而上学入門』, 勁草書房.
- 古賀崇, 2008, 『アーカイブスの新たな地平へー「情報を残す」ための制度と文化への戦略』
NII オープンハウス.
- 小風尚樹・小川潤・櫻田宗紀・長野壮一・山中美潮・宮川創・大向一輝・永崎研宣編, 2021,
『欧米圏デジタル・ヒューマニティーズの基礎知識』, 文学通信.
- Speaks, Jeff, “Theories of Meaning”, *The Stanford Encyclopedia of Philosophy* (Spring 2021 Edition), Edward N. Zalta (ed.), URL=<<https://plato.stanford.edu/archives/spr2021/entries/meaning/>>.

(いのうえ さつき 千葉大学大学院人文公共学府博士前期課程)

Seeking the Unseen: A Digital Archive Journey from Oxford

MORITA, Kiho

Abstract

This manuscript records my activities during and after my attendance at the “Digital Humanities at Oxford Summer School,” where I encountered digital archives. I have long been interested in visualizing the inexpressible, which aligns with my background in cognitive science. Through summer school, I discovered the appeal of digital archives, which preserve the present moment and transform numbers and letters into engaging visualizations. This resonance led me to explore digital archives further and apply to the master’s program in Digital Humanities (DH) at the foreign graduate school. I developed a research plan for creating a digital archive of yoga, aiming to archive not only poses but also the state of mental stability, and to present it to a broader audience through gamified exhibitions.

Introduction

My journey into the realm of digital humanities (DH) commenced with an event titled “Digital Humanities at Oxford Summer School” held from 3rd to 7th July, 2023. This report documents my research activity on DH during and after attending the summer school. I aim to illustrate how this course resonated with my academic background and interests. Furthermore, I want to convey what it means to exhibit archives that relate to “situations” through my research plan in DH.

The Resonance of Interests in Cognitive Science and DH

“Digital Humanities at Oxford Summer School” served as the catalyst that introduced me to the field of DH. I attended the Digital Cultural Heritage class and learned about the necessity of recording and exhibiting cultural heritage as digital archives and specific methods for modeling cultural assets using multiple software programs such as SketchUp and Unity. Using Photogrammetry, I attempted to reproduce my film camera on the computer. However, due to the inability to maintain a consistent shooting angle, the resulting 3D model lacked clear contours and resembled a mud-covered object. Many

other participants encountered similar challenges, which facilitated discussions regarding our modeling processes and to cheer for those who succeeded. Additionally, I learned about presenting modeled objects. I had the opportunity to experience virtual spaces of ancient ruins through VR goggles and visit the Ashmolean Museum and Oxford University Museum of Natural History to observe exhibition methods using digital technology. The class was dynamic and engaging, far from the traditional format of desk-bound lectures or mere discussions.

During this period, my interest aligned with the domain of digital archives. Being a student of cognitive science, I have always been interested in making non-linguistic sensations and emotions tangible through experiments and data analysis. I was drawn to the idea of digital archives that preserve the current moments of otherwise deteriorating things. They visualize strings of numbers and letters into easily understandable visual representations, even for those outside the field. I was immensely captivated by my learnings that upon returning from Oxford, I immediately decided to apply to the master's program in Digital Humanities at the foreign graduate school and began preparations. What fascinated me was the eM+, which refers to the Laboratory for Experimental Museology. It was introduced in the summer school class. They use the latest audio-visual systems, such as XR, to create exhibitions and installations for digital museum studies. Through deeply immersive and interactive digital archive exhibition experiences, their goal is to personalize the archive for the viewer. I completed my application in December 2023 and am now awaiting the results.

To reify and beyond: Digital Archiving “state of stability”

While awaiting the results, I am also further developing the research plan for DH outlined in my statement of purpose. Essentially, the digital archives that interest me focus on “situations,” and they are presented through exhibitions. Digital archives can broadly be divided into two categories: archives of “objects,” which include physical artifacts like excavated items and ruins modeled in 3D, and archives of “situations,” which preserve traditional performing arts and craftsmanship techniques, namely practical and embodied intelligence. To deepen my understanding of archives of “situations,” which are less common than archives of “objects,” I believe an exhibition experience similar to what eM+ is pursuing would be appropriate.

I am planning to create a digital archive of yoga. Besides creating a record of the different yoga poses, I intend to include records on the “state of stability,” which is the original purpose of yoga. To achieve this ideal state of stability, I plan to approach the yoga master’s ideal state from various angles, such as motion capture, vital sign measurements: heart rate and depth of breathing, and even brainwave measurements. By developing a game that allows the audience to experience and learn from the ideal “state of stability” through trial and error as they mimic yoga poses and get closer to the demonstration data by instructors, I aim to visualize the inherited bodily knowledge that transcends time and space and expand the possibilities of new cultural experiences with gamification.

This research plan has been refined through feedback received from several individuals. Through activities such as poster presentations at the “DH Young Researchers’ Meeting” on 9th February, 2024, and participation in the “WISE Program (Doctoral Program for World-leading Innovative & Smart Education) DH Workshop” on 5th and 6th March, 2024, I had the opportunity to present my plan to numerous researchers, ranging from young researchers to veterans. During these interactions, I raised points to improve my plan and received valuable advice. I also sought guidance from professors specializing in engineering both inside and outside the university about my plan, seeking advice on how to be conscious of the existence of devices in a state aimed at mental stability so as not to emphasize them too much. One critical issue that arose from these discussions was whether achieving the same numerical state as the ideal data, in other words, reproducing the ideal state, could be considered as archiving the state of mind. As a digital archive, encoding the ideal state with specific numbers results in the loss of information that was not encoded. Additionally, information about states that viewers could not reproduce due to trial and error would also be lost. We must consider to what extent we can tolerate these two types of losses and whether there is value in archiving the ideal state with the assumption of such losses.

The transformation from my participation in the summer school in July 2023 to writing this report in March 2024 has been remarkable. I want to continue advancing my research next year at this same pace of growth.

(MORITA, Kiho Graduate School of Humanities and Studies on Public Affairs,
Chiba University)

農業普及誌における若年の女性農業者像
——雑誌『農業千葉』を対象とした予備的考察——

Young Female Farmers in Japanese Agriculture: A Preparatory Analysis
of the Image of Young Female Farmers in *Nogyo Chiba*

七星 純子

NANAHOSHI, Junko

Abstract

This paper documents a preliminary study to examine the portrayal of young female farmers featured on the cover of the post-war agricultural extension magazine, *Nogyo Chiba*, published in Chiba Prefecture, Japan, which was published monthly from 1947 to 2003. Young unmarried female farmers appeared intermittently from 1958 to 1985 on the cover. These women were differently attired compared to women farmers that had preceded them. The magazine also featured an article written by the women. The article presented the women's opinions regarding farm management and work-life balance, which shows a more subject-oriented image of women. This article examines the images of young women and the position of women farmers in women's magazines of the time, covering the period 1965-1974, during which women farmers were featured on the cover.

The women's magazines of the period showed that they were expected to be the main actors of consumption by the reserve army of housewives, and that a new image of young women portraying female independence, beauty and freedom, was being transmitted. Conversely, it was shown that the image of women farmers was presented as proactive in both agricultural and domestic labour, amidst the trend towards dual employment. These findings suggest that the unmarried female farmers in the target journals, although reserve housewives, may have expressed subjectivity and beauty beyond their intra-family roles.

Finally, the study provides a direction for future research on the meaning and impact of the dissemination of images of young women farmers in extension magazines that publicise the modernisation of agriculture. First, we explore the editorial policy of the target period's magazines and the image of young women farmers in other agricultural magazines and the image of youth farmers at the time. In doing so, the need for an approach from Digital Humanities, hitherto overlooked in previous studies, is indicated.

1 はじめに

本稿は、農業の普及誌である雑誌『農業千葉』の表紙に、ある時期だけ登場していた若年の未婚の女性農業者の役割を明らかにしていくための準備的な考察を目的としている。

雑誌『農業千葉』は、協同農業普及事業の普及誌である。協同農業普及事業は、1948年8月から展開された。これは「農地改革、農業団体の改組等、戦後における農村民主化のためにとられた一連の施策の上に立って、農業者が真に意義ある農業経営、農家生活が営めるよう援助する目的をもって発足したもの」（社団法人全国農業改良普及協会 1968a: 11）である。この普及事業を農業者に周知するために、普及誌が都道府県ごとに発行されていた。千葉県の場合は『農業千葉』であり、農業関係者内での情報共有や連携を通じて、農業を発展させていくことを目的にして発行された（千葉県農業改良協会 2003）。1947年に創刊され60年間にわたり基本的には毎月刊行されていた。

『農業千葉』で毎回掲載されていた「特集」では、農法や流通、環境に配慮した農業、農業従事者への注目、農家の家庭運営などが特集されており、その時代の農業そのものや暮らしに至るまでテーマは多岐にわたる（七星・米村 2019）。そのような農業雑誌だが、1958-85年には断続的に女性が表紙を飾る（表1）。キッチンに立つ女性や、着物やワンピースなど、農作業とは異なる服装をした女性たちが登場する。雑誌内には表紙に登場した女性に関する記事があり、未婚の女性農業者であることが読み取れる。当初は表紙の女性たちの推薦文が掲載されていたが、その後、女性自身が書いた文章が掲載されるようになる（七星・米村 2019）。

これまでは、表紙を飾った女性たちが書いたと考えられる文章群を対象に目視とテキストマイニングで調査を行ってきた（七星・米村 2020, 七星 2023）。その結果、女性についての推薦文の時期に比べて、本人たちが書いたと考えられる文章からは、女性の主体性が増している様相がうかがえた。詳細は後述するが、とくに「1965-1974年」の記事は、千葉県の農業が「計画的生産への誘導が始まった高度経済的成長時代」でもあり、若年の女性農業者の経営への積極性が見られた文章群であった（七星 2023）。ただ、経営に対する積極性への期待と表紙のファッションナブルな様相により、農業普及誌で何を発信しようとしていたのかという点については考察してこなかった。そのため、本稿では『農業千葉』の中で、女性たちの積極性がより見えた「1965-1974年」を中心に、当時の女性雑誌文化や農業女性の位置づけを整理し、その視座から『農業千葉』の表紙の女性像についての考察を進めていくことにする。

表1 雑誌『農業千葉』の表紙の変遷の一部

1940年代	1950年代	1960—1980年代
 <p>昭和二十三年</p>		

出典：『戦後千葉県のあゆみ—農業千葉創刊40周年記念誌—』より筆者作成

2 農業雑誌に登場する女性に注目すること

2.1 雑誌『農業千葉』と表紙を飾る女性たち

本稿が対象にしている雑誌『農業千葉』は、1947（昭和22）年に創刊され、2003（平成15）年まで約60年間にわたり発行されていた。1946（昭和21）年に発行された記念号および廃刊時の特集号を含めると、計668冊になる。創刊当初は年に4-5回の発行時期もあったが、1949（昭和24）年5月以降は、基本的に毎月発行されていた（七星・米村2019）。

『農業千葉』は、1947年という戦後混乱期ともいえる時期に創刊されたわけだが、廃刊特集号では創刊の背景として次のことをあげている。①「農地解放」により小作農から解放された農家の生産意欲の向上、②当時日本政府が打ち出した指導農場制による指導組織に対し、アメリカ式の農業改良普及事業の指導制度への期待が高まったこと、③農業協同組合法による民主的・自主的組織の発足、④復員した中堅農業者が農業技術等の情報を期待していたこと、の4点である（引地2003：20）。雑誌『農業千葉』は、農家、研究者、普及指導者の橋渡しになることが期待され（記念号1946）、千葉県の農業改良誌として位置付けられていた。

このような『農業千葉』の表紙を、未婚の若年の女性農業者が飾るようになる。発行当初は、表1にあるような千葉県の地図に土性や気象、水稲地域などが記入されたものや、農作業の様子の写真、作物の病などがあつた。平成（1989年～）に入ってから房総の祭事の写真や「房総の技」と称された県内の熟練者の紹介、県内の花や草木や鳥の写真などもある（七星・米村2020）。

表紙に初めて女性がひとりで登場するのは、1951年11月号（第5巻）である⁽¹⁾。表紙についての紹介文等はなかったが、農作業をしているひとりの女性が登場する。次の登場は

1953年である。この年は1月号以外の表紙を女性が飾り、3月号からは農作業風景とは異なる装いをした女性が登場し始める（七星・米村 2020）。その後、1957年にも女性が表紙を飾るが、本稿が注目したのは1958年10月号からとなる。というのも、女性が表紙を飾るだけでなく、女性についての文章が雑誌内に掲載されるようになったためである（表 2）。ただし、紹介文の量は号によっても異なるが、1ページ以上にわたって掲載されるようなものではなく雑誌内で占める割合としては少ない。

表 2 雑誌『農業千葉』のうち表紙の女性についての記事掲載状況

発行年	紹介文の書き手	対象数
1958年10月－1962年4月	推薦者による紹介文	43
1962年5月－1963年2月	「私の意見」など女性自身による紹介文	10
1963年3, 4月	推薦者による紹介文	2
1963年5月－1974年12月	「私の意見」など主に女性自身による紹介文	136
1978年1月－1981年12月	推薦者や編集部による紹介文で女性の年齢記載や夫婦の登場もあり	48
1983年1月－1985年12月	推薦者や本人による紹介文で女性の年齢記載あり	36

推薦者による紹介文では、1959年の「身長一米五十五センチ、体重四十五キロの均整のととのった近代的な女性であり、ヒップ、バストそれと？…については特定の方のみお知らせいたしたいと思う」（第13巻第3号 p. 101）や、1961年には「娘ひとりにムコ何人か？理想のタイプは、男らしい人とのこと。先着順とはゆきませんがお早目にどうぞ」（第15巻第5号 p.125）といったものがある。

一方、表紙の女性自身が書いたと考えられるものには、1965年の「農村社会が、近代社会の中で立ち遅れた特異な社会ではなく、近代化された社会にならなければ青年の離農、離村をはばむことは困難だと思います」（第19巻第2号 p. 89）や、1970年には、「ますます農地は減少され、専業農家から兼業農家へと変わりつつ、都会や工場へ流出しています。急激な都市化の波に乗った農業経営をすることは、とてもむずかしいことです」（第24巻第12号 p. 86）といったものがある。そのほか、都会や勤め人への憧れや、離農する友と農村に残る自分との葛藤や、家事や子育て、女性の立場の低さや過重労働といった視点が読み取れる内容になっていた（七星・米村 2020）。前述した推薦者による紹介文とは異なり、農業や農村で暮らすことへの女性自身のまなざしが読み取れる。

この女性自身が書いたと考えられるものは、1962-3年に10記事、1963-74年の136記事（表 2）、1983-5年は6記事（七星 2023）で、合計152記事であった。この152記事を対象にしたKHCoderを用いたテキストマイニングからは、「家庭」、「生活」、「経営」という語を

媒介にした農業経営やワークライフバランス、若年農業者の実際や将来といったことが主なテーマとなった文書群であることが見えた（七星 2023）。また、『農業千葉』における千葉県の農業の特徴の時代区分⁽²⁾で見たところ、「1960 年前半」（記事数 29）の特徴語としては「農業」、「生活」、「思う」、「農村」、「人」といった順で抽出され、「1965-1974 年」（記事数 117）では、「農業」、「経営」、「考える」、「自分」、「今」といった順で抽出された（七星 2023）。記事数に差があるため単純な比較はできないが⁽³⁾、「1965-1974 年」になると農業の経営への語が特徴となり、また「1960 年代前半」のように「農村」や「人」ではなく「自分」というより個人的なことを扱っている傾向があった（七星 2023）。「1965-1974 年」は、千葉県の農業は「計画的生産への誘導が始まった高度経済的成長時代」であり、若年の女性農業者の農業経営への積極性を求めている、あるいは、求められていたことがうかがえる文章群となっていた（七星 2023）。

このように『農業千葉』の表紙を飾る女性たちに関する記事は、記事の書き手が女性自身になると客体というよりは主体としての女性像が示されるようになっている文章群と捉えることができる。

2.2 農業雑誌の表紙

ここまで、これまで行ってきた調査についてまとめたが、そのほか、管見の限り『農業千葉』そのものを対象にした先行研究は現在のところはない。ただ、農業雑誌の表紙の女性に着目したものには、長船亜紀子の雑誌『現代農業』のジェンダー表象の変遷に関する分析がある（長船 2021）。

長船は 1962-2000 年に発行された『現代農業』のうち、女性が表紙になっている号の表紙と「表紙のことば」を分析対象にしている。その結果、長船は、表紙モデルの対象は時代背景を強く反映していること⁽⁴⁾、女性は「個人」として捉えられておらず『家』の構成員として捉え、家族内役割を強調することが 20 世紀末まで継続され、「変わらない服装と笑顔、ネガティブのない『表紙のことば』で、素朴・実直な労働者としての農業者」（長船 2021: 30）が描かれていたことを指摘している。つまり、『現代農業』の女性モデルの表紙は「変わらない服装と笑顔」で女性農業者の役割、それは主に女性の「家族内役割」と「労働者としての農業者」という 2 つの役割を表現していることになる。農業雑誌の表紙に登場する女性農業者に注目することで、時代ごとの女性農業者に期待されていたことを読み解くことにつながる可能性がある。

女性農業者には、「農家の嫁」といった表現によって想起されるものがあるように、長船が指摘していた「労働者としての農業者」と「家族内役割」を一手に引き受けているイメージが内包されてきたと言える。「農家の嫁は、足の裏についた飯粒のようなものだ。踏まれてばかりだが離れられない」（隅谷 1996: 367）というように、女性農業者の実際も、その

イメージも厳しい状況にあった。たとえば、『農業千葉』の40周年の記念誌には「農業者の戦後40年」というコーナーがあり、以下のような記事がある。

義母が、子宮癌の手術をして、仕事が出来なくなったので、私は、労働力として貰われて来たのである。若い男の使用人がいた。その使用人と私は同じ待遇だった。雨の降る冬の寒い日、物置で私は俵編み、使用人は縄ないをしていた。皆は母屋で、火鉢を囲んで餅を焼いている。私達二人には黍の黄色いお餅を一つずつ、お皿にのせて届けにきた。私も白いお餅を皆と一緒に食べたかった」（『戦後千葉県農業の歩み 農業千葉創刊40周年記念誌』P.177）

これは、1949年に千葉県のある農家に嫁いできた女性が、1952年からつけていた37冊の生活日記を振り返りながら当時を振り返って書いた手記である。女性農業者、とくに「嫁」という立場における困難な状況は想像に難くない。

一方で、女性農業者の役割の変化が指摘されている。靄理恵子は、農家の兼業化における女性農業者への影響について論じている。靄によると、農業が主ではない兼業化が進むことは「農業の経済的・社会的位置づけが大きく下がり、農業以外の仕事への従事が望ましいこと」（靄2007：84）となる。しかし、女性農業者にとっては「補助者にすぎなかった女性が、農業者として一人の責任ある主体として行動することを求められる現実に投げ込まれたのである。（中略）一番大きな変化として女性たちがあげるのは、自分たちで考えて自分で決めるということである」（靄2007：84-85）という。また、天野寛子によると、高度経済成長期の後半期（1965-1973年）は「農業の兼業化が進み、女性農業者は健康を犠牲にして働かざるをえなくなる反面、パートタイム労働による収入は本人の管理下におかれ、パート労働の時間が姑の監視外になること等、高度経済成長という大きな時代の波の中で農家の嫁と姑の力関係が変わっている」（天野2001：45）と指摘している⁶⁾。兼業化は、農家にとっては農業だけでは生活が成り立たないといった消極的な状況ではあるが、女性農業者にとっては異なる意味があることが指摘されてきた。

女性農業者は、前述の手記にもあるように厳しい立場に置かれてきたが、兼業化という変化に伴い、女性農業者が農業の主体となったり、家族内のパワーバランスが変化したりと、女性農業者像の変容もあったのではないかと考えられる。『農業千葉』に限れば、表紙の女性農業者たちの紹介や女性農業者が書いたと考えられる文章群からは、若年の女性農業者の位置づけの客体から主体への変容が見受けられた（七星・米村2020，七星2023）。『農業千葉』の読者層については現在のところ不明であり、どのように講読されていたのかは今後調査を進める必要がある。しかし、『農業雑誌』の表紙の女性農業者の描かれ方に注目することは、この変化の時期の新たな女性農業者像を読み説くことにつながると考えられる。

また、本稿が対象としている「1965-1974年」は、女性雑誌の転換点が含まれており、新たな女性像が創出された時代でもある（cf. 木村 1989、落合 1990）。女性雑誌は単なる情報の発信にとどまらないと言われている。木村涼子は、戦前の婦人雑誌の分析から「マスメディアは、単に既存の合意を反映するものではなく、状況に応じて生じる葛藤を調整しつつ合意を日々新たに形成しつづける装置」（木村 2010： 283）と論じている。読者に主婦になることを強調はしないが、雑誌自体が『主婦』というライフスタイル／職業に向けての社会化機能を有していたことは明白である」（木村 2010： 283）と指摘している。それは、既に「主婦」に期待されていることの反映にとどまらず、読者との間で新たな「主婦」の役割やイメージといったものが形成されていくことになる。この点に依拠するならば、農業雑誌の表紙を飾る女性像も、当時の女性農業者に期待され社会的に合意の取れていたイメージの反映にとどまらない可能性もある。

そこで次節以降、今後の調査に向けて『農業千葉』の表紙が未婚の若年の女性農業者であった時代において、女性雑誌そのものがどういった女性像を発信していたのか、また、農業女性の位置づけはどのようなものだったのかということ概観しておきたい。というのも、本稿が対象にしている表紙や記事は分量が少なく、位置付けや結論づけるには十分と言えないからである。そのため、ここでは同時期の雑誌に見る女性像ということに着目しておきたい。

3 女性雑誌研究にみる女性像

本稿が対象にしている 1965-74 年は、女性雑誌の転換期に重なる。1970 年代には、現在も発行されている『an・an』と『non・no』が創刊され、この2つの雑誌が女性像にもたらした影響は大きいと言われている。ここでは、1970 年前後における女性雑誌研究について見ていく。

3.1 1970 年以前の女性雑誌分析研究にみる女性像

橋本嘉代によると、1970 年代以前は『主婦の友』、『主婦と生活』、『婦人生活』、『婦人倶楽部』といった既婚女性を対象とした雑誌が人気を博していた（橋本 2017： 169）。橋本は、これらの雑誌は、結婚と家庭の維持を女性の第一の目標として、主婦に役立つ実用的な知識の提供を行っていたものだったと指摘している（橋本 2017）。

また、女性週刊誌も盛況であった。井上輝子によると、1950 年代から 1960 年代は週刊誌ブームがあり、1957 年『週刊女性』、1958 年『女性自身』が創刊された。女性週刊誌は、1958 年 11 月 27 日の皇室の婚約を機に成長を遂げたという。見合い結婚が多かった当時、皇室の恋愛結婚は、結婚の新たな選択肢の社会的承認という意味を持っていたという。そのため、それ以後の女性週刊誌では、恋愛の機会に恵まれるためのメイクやファッションといったものもテーマになっていったという（井上 2008）。

また、「家族の団欒」や「片すみの幸福」といった「家庭」に生きがいを持つ人々も増加した時代であり、家庭の主な担い手である主婦にも光があたる。たとえば、前述の『主婦の友』では、家事や育児、家庭経営に関する実用的な情報が掲載され、家庭を主に営む主婦層のニーズに応じていたという。井上は、当時の雑誌について「恋愛結婚を夢見る若い未婚の女性たち、結婚後は、マイホームの担い手として家事と育児に専念する主婦たち。これが1950-60年代のメディアが描いた女性像であった」（井上 2008: 208）と論じている。つまり、結婚前後の女性を対象にしているが、家庭の女性役割に包摂されていく女性像が描かれていたことがうかがえる。

当時の女性雑誌に見られる女性像について落合恵美子も論じている。1955年頃は、専業主婦の大衆化により主婦がイメージ上で成立し、一方で未婚女子雇用者層である「BG」（ビジネスガール）像が成立した時期でもあった（落合 1990）。高度経済成長に伴い女子労働の主力は、家族従業者から雇用される者へと変化し、若年層が結婚退職までの少しの間に勤めるようになった。落合は「ビジュアル・イメージに表れるBG像は、職業人というより『自由な若い娘』といったものである。勤めに出ることで恋愛結婚のチャンスも増えたので、BGは男性の目を意識し、恋愛に憧れる結婚予備軍として描かれる」（落合 1990: 230）と指摘している。さらに落合は「落ち着いて自制心のある『主婦』と「主婦予備軍のチャーミングな『BG』たち」という2つの女性像の類型により「農家のかかも、仕送りのために過酷な労働に堪える女工も、男性に伍して働く職業婦人も、イメージの上では周辺に追いやられる」（落合 1990: 231）とも論じている。この点を本稿の関心からみると、従来の女性農業者のイメージは、それまでの家族の中の女性像とは異なる伸びやかな若年の未婚女性が描かれる時代の中で、周辺化された女性像になりつつあったことが見えてくる。そういった時代に、未婚の若年の女性農業者は『農業千葉』の表紙を飾っていたことになる。

3.2 女性雑誌の転換点

前述したように、1970年には『an・an』が、1971年には『non・no』が創刊され、この時期は女性雑誌にとっては転換点であった。『an・an』はフランスの『ELLE』の提携誌としてスタートし、先鋭的な新しいスタイルを提案したもので、『non・no』は全国的展開を狙った後発誌で、かわいさと実用性を追求した雑誌であった（橋本 2017）。両者は「誌面のビジュアル化・大判化によって広告媒体としての機能が強化された点では共通している」（橋本 2017: 166）という。そして「アンノン文化」、「アンノン族」と呼ばれるようになっていったという（井上 2008）。

橋本は、「アンノン」雑誌について、読者に楽しく魅力的な新しいライフスタイルを提案しながら、購買意欲を自然に刺激したと述べている。「この二誌が、高度経済成長期以降『おしゃれ』『買い物』を若い女性の関心事にし、彼女たちが能動的に消費の主役になる流れを後押ししたといえる。服の型紙や作り方ではなく既製品を着たモデルの写真を載せ、女性に

とっての洋服を『作るもの』から『買うもの』に変化させたことも見逃せない」（橋本 2017: 168）と指摘している。主な読者である「OL と呼ばれる女性たちは、補助的な仕事に従事する低賃金労働者であると同時に、消費者としての役割をも期待されるようになった」（橋本 2017: 168）と論じている。つまり、消費の主体という女性の社会的な役割の変化があり、また、それまで女性役割で花嫁修業とも言われていた洋裁からの解放の端緒でもあったと言える。

さらに、井上は「アンノン」雑誌の創刊時期はウーマンリブ運動も始まり「女性の自己主張と、女性向け消費市場の開拓と、両方の意味で、日本のジェンダー文化は、変化の兆しを見せた」（井上 2008: 209）と述べている。井上によると、当時創刊された『an・an』、『non・no』に象徴される文化の主要な特徴は、「①若い女性たちを、消費の主体として位置づけたこと ②レディメイドの衣服が、ファッショナブルな購入対象になったこと ③未婚の女性に期待されていたジェンダー規範から自由な女性像が提示されたこと」（井上 2008: 210）などにあるという。仕事を持った未婚の女性たちは、結婚前の限定期間ではあるが、家族のためでなく、自分のための可処分所得を持ち消費市場に参入しはじめた時期であった。井上は、「1970 年代から 80 年代にかけての時代は、従来からのジェンダー・ステレオタイプの拘束力が弱まる一方で、女性には育児役割からの逸脱が厳しく指弾されると同時に、新たに『美しさ』役割が期待されるという、ジェンダー規範の再編成の時期であった」（井上 2008: 214）と論じている。つまり、女性役割として担ってきたことの一部は消費という形で対応しながらも母親規範は強固であり、束の間の未婚期の自由な女性像を通じて「美」という新たな役割が期待されていったことがうかがえる。

この点について、坂本佳鶴恵も『an・an』、『non・no』はファッション誌を形作ったもので「1970 年代大都市の若い女性に向けたビジュアル・ファッション誌の先駆となった」（坂本 2019: 355）と指摘している。これは「家事や花嫁修業と結びついていた洋裁を排除し、既製服を流行のおしゃれな衣服としてファッション化したことで、主婦業の家事労働から解放された、新たなジャンルの女性雑誌」（坂本 2019: 355）としての先駆性でもあった。坂本は、両雑誌は青年期未婚女性の消費文化を構築し「『女の子』という未婚青年期のアイデンティティの主張」（坂本 2019: 355）であったと指摘している。両雑誌を通じた「女の子」の自己表現は、親からの自立の表現でもあり、若い男性とは異なる独特な表現で「まだ女性の消費行動に制約があった時代に、『女の子』の消費行動が企業や社会の注目を集め、結果的に消費の領域において、女性の自立や自由の拡大を促した」（坂本 2019: 356）と論じている。坂本の主張からは、既製服のファッション化は、服飾に関わる家事労働からの解放にとどまらなかったことがうかがえる。

ここまで見てきた先行研究に依拠すると、本稿が対象にしていた時代の女性たちは「女性の自己主張と、女性向け消費市場の開拓」が促される中に見えたことが見える。このことがどの程度浸透したかは定かではないが、女性雑誌においては、実用的な情報を活用できるよ

うな主婦像と「主婦予備軍」である若年の女性像が発信され、その後、新たな若年の女性像が提示された。それは、消費という限定的な領域ではあるが、主体として期待され、これまでの家族の中の若年女性とも若年の男性とも異なる「女性の自立や自由の拡大」が促されるような女性像が提示されていった時代であった。

4 女性農業者

本稿の対象の1965-74年は、女性雑誌上では、束の間の若年の未婚期の新たな女性像が提示された時代でもあった。しかし、「BG」や「OL」と呼ばれていた若年の未婚の女性たちの職業は、その多くは周辺化されたものであり、やがては主婦役割や母親役割を担うことへの期待が通底していたことがうかがえる。一方で、本稿が対象にしている未婚の女性農業者の文章群からは、すでに農業を学び実践し、自分が望む将来の農業経営像についても記されている（七星・米村 2020）。そこで、この当時の女性農業者にはどのようなことが期待され、また、女性農業者にも影響を与えたと考えられる兼業化が千葉県ではどういった状況だったのかを見ておきたい。

4.1 女性農業者への期待

本稿が対象にしている1965-1974年に、女性農業者にはどのようなことが求められていたのか。加勢川堯によると、1955（昭和30）年頃から農業労働では「単なる労働のみにない手のみならず、ときに農業経営の責任者としての女子が見うけられる」（加勢川 1972: 38）ようになったという。その点について加勢川は「農業経営における男子の脱農化現象であり、一方農業への女子の定着化」（加勢川 1972: 38）と論じている。加勢川は「女子」の中心は主婦であり、家族農業も生活優先に向かうだろう中で「家庭経営の責任者である主婦が、このような農業経営のなかで重きを加えてくると、家庭生活がどうなるであろうか」（加勢川 1972: 38）と問題提起をする。当時は「現状では兼業農家のほうが、専業農家にくらべて家庭管理に、時間的余裕をもっている」（加勢川 1972: 42）状況で、1972年には主婦が農業経営の責任を担当している兼業農家が全農家の62%であったという（加勢川 1975）。

加勢川は主婦の農業労働（肉体的、精神的な負担）と家庭運営による過重な負担を問題視している。一方で「都市近郊の先進的専業農家のなかに、農作業から解放されて家庭管理に専心しうる主婦のいる」ところもあり、容易ではないが「こうした農家こそが今後、志向しうるものであろう」（加勢川 1972: 43）と論じる。兼業農家が脱農業を遂げることが難しく、一方で、先進的専業農家に向かうことも容易でない状況ではあるが、「農家主婦自らが、主体的に主婦の座を確立するようつとむべき」（加勢川 1972: 44）と述べる。つまり、女性農業者が定着し兼業化が進行していたが、女性には農作業よりは家庭管理の役割を果たすことが期待されていたことになる。しかし、前述したように兼業化の進行の中で女性農業者は、補助者ではなく責任が求められていった。周囲の女性農業者への主婦役割の期待がある中

で「農業の肉体的労働ばかりでなく、その精神的労働まで背負い込む主婦」（加勢川 1972: 37）は、農業経営の決定をしていく主体としての役割を負うことになっていったということでもある。

このような主張の背景には高度経済成長の影響もある。天野寛子は、1958-1973年は「農家が高度経済成長により顕著な影響を受ける時期」（天野 2001: 44）だったと指摘している。天野によると 1964 年までの高度経済成長期の前半期には、農業労働力の他産業への流出、所得格差の拡大、主婦農業の増加に伴い家庭生活に十分に時間が取れない等の「農家生活がそれまでに経験したことがないような問題」（天野 2001: 44）が生じていた。後半期の 1965-1973 年では、農業労働力問題、農業技術の転換、農民の健康問題、都市化、生産従業者の老齢化・婦人化、地域住民の連帯感の喪失、都市農村間の地域格差の拡大といった農業問題と農村生活の問題が深刻な時期を迎えていたという（天野 2001）。

農家生活でこれまで経験したことがないような問題が起きた変化の中でも、農業に携わる女性を取り囲む「戦後一貫して『農村の問題』があったという。この点について天野は「悪意ではないとしても『主体的女性農業者』には、『農労働も完全に、家事も手を抜かずに』というスーパーウーマンを男性側から期待しているのであり、そう期待することが『女性を評価すること』であり『男女平等』であると信じて」（天野 2001: 31）いたことにあると指摘する⁽⁶⁾。天野の主張からは、男女平等とはいえ、男性が家事労働等を含めた家庭運営を女性と共にしながら女性も農労働の主体となるというよりは、家庭運営についての役割が女性にのみあることはそのままに、さらに女性の農業労働での主体性への期待が、戦後の女性農業者を取り巻いていたことがうかがえる。農村における男女平等といった体裁を取りながらも、女性の役割を負荷させることは、これまで経験したことの無い問題への対応の一つにも見える。

一方で、前述したように、高度経済成長期の後半期（1965-1973 年）における農業の兼業化の進行は、女性農業者の負荷を増やしたが、パートタイム労働により「高度経済成長という大きな時代の波の中で農家の嫁と姑の力関係が変わっている」（天野 2001: 45）時期でもあった。パートタイム労働の収入を、女性農業者たちが何に充てていたかということは、さらなる調査が必要になるが、家族から離れる時間を持ち、家族経営とは異なる人間関係の中での労働、そこで得た収入が家族の関係性や農村の中の女性の位置づけといったものを変化させていったことがうかがえる。

このように、家族成員全員が農業に携わっていた農業ではあるが、兼業農家も増えていき、家族での農業経営の中での女性農業者の役割の変化もあった。本稿が対象にしている時代は、大都市では工業化が進み、男性が企業に雇用され、女性が専業主婦になる家族形成が進んでいった。そういった性別役割分業に基づく家族観は、大都市だけでなく農家でも志向されていった時期でもあった。実際の農家では、農業経営の責任と家庭経営の責任を中心的に負っていた女性農業者もおり、女性たちの過重労働が危惧される一方で、女性農業者自身の

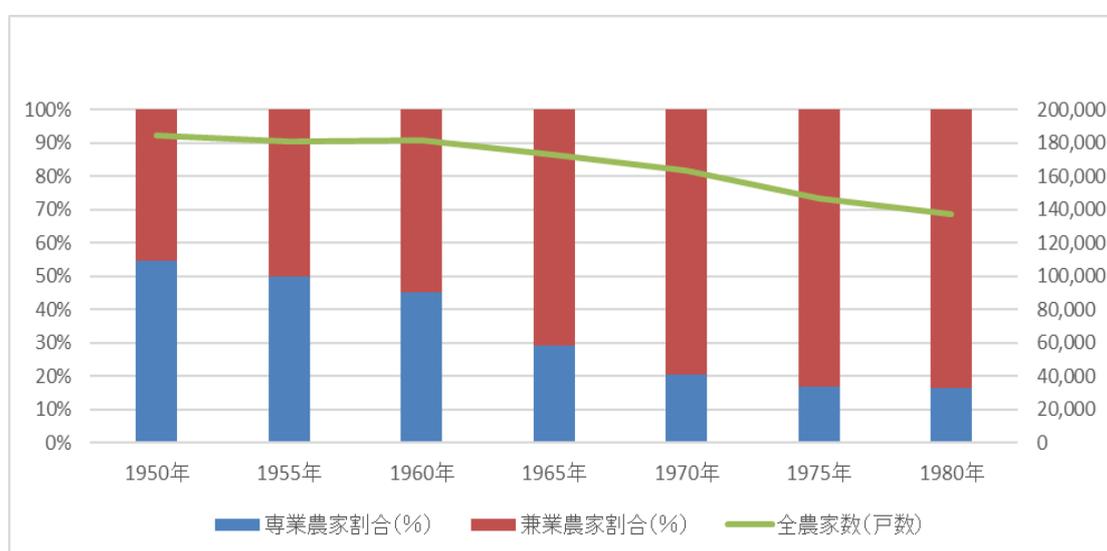
農業以外の労働による家族関係の変化もあった。対象にした文章群を記した若年の女性農業者たちは、そういった変化の中で未婚期を過ごしていたことになる。

4.2 千葉県の農業

次に、本稿の対象時期の千葉県の農業を概観する。千葉県の農業は、1952（昭和 27）年を境に兼業化の増大や京葉工業地帯の造成などがあり、農業の「曲りかど」にさしかかったと言われている（竹内 1964）。

表 3 は、千葉県内の全農家数と、それに対する専業農家と兼業農家の割合の推移である。

表 3 千葉県内の全農家数と専業別農家数割合の推移



出典 『農林業センサス累年統計 - 農業編 - (明治 37 年～令和 2 年)』
「総農家等 専業別農家数」より筆者作成

1950 年以降 1960 年までは全農家数に大幅な変化はないが、専業農家が減少し、1960 年には兼業農家の割合が 50%を超えている。その後、全農家数自体も減少するが、専業農家の割合の減少幅が大きく、1960 年には 40%後半代であったが、本稿が対象にしている 1965 年には 30%弱となる。その 10 年後の 1975 年には 20%を下回っている。千葉県の農業は、本稿の対象年代に入る前に兼業化が大幅に進み、対象年代にも兼業化の進行は止まらなかったことが読み取れる。

農業の「曲りかど」と言われ兼業化が進行した中で、実際の千葉県の農業はどのような様相であったのか。1955-64 年（昭和 30 年代）は「生産の選択的拡大と農業の近代化」（竹内 1987: 87）という時期を迎えたという。高度経済成長、京葉工業地帯が造成、人口の増加といった経済変化がある中で、より収益性の高い作物の生産選択や経営の集約化、主産地の形

成等を実施し総生産が増大した。主流であった米、麦、芋の生産が後退し、野菜（きゅうり、トマト、スイカ）や畜産が進展した。耕耘機といった農業の機械化が進行し、農業労働の10時間あたりの所得が2倍近くに上昇した。生活面では、房総から蚊やハエを駆除することや貯蓄、互いに親切にすることなどを目指した新生活運動に取り組んでいた（竹内1987）。

本稿が対象にしている1965年-1974年（昭和40年代）のうち、昭和40年代前半は、高度経済成長の影響を受け農村を後にした人もいたが、農業生産は規模の拡大や施設化、装置化への指向により増大した。後半は高度経済成長の影響による「機械化貧乏」が、米の生産調整施策とともに表面化し、1973年のオイルショックにより、とくに大きな畜産農家や施設園農家に影響を与えたという（竹内1987）。昭和40年代前半の全国的な米の生産の過剰により県内でも生産調整があったが、野菜や畜産部門の順調な伸びがあったため1969（昭和44）年には、総粗生産額が全国で第三位となった。また、列島改造論による土地ブームの影響もあり耕地面積の減少や表1に示したように兼業農家の増加もあり、農家所得のうち農業所得の占める割合が年々低下した。ただ、農外所得が伸びたこともあり生活水準が順調に伸びたため一人当たりの可処分所得も増加し、農家生活にゆとりが出てきた時期であった（竹内1987）。農家数も農業所得も減ったが暮らしには余裕が生まれるという、農業の仕方だけでなく農家の生活も変化していった時期でことがうかがえる。

4.3 千葉県という立地

千葉県の農業の特徴の一つは、都市近郊という立地にもあるだろう。前述した「アンノン」文化が、農村にどのくらい浸透したのかは今後の調査が必要だが、千葉県という都市近郊という立地から、あまりにも遠い存在ではなかったと考えられる（七星・米村2019）。たとえば、1962年には以下のような記事があった。

「女のくせに自動車になんか乗って…」こんな言葉をよく耳にしました。（中略）街に行くBGを思うと置き去りにされたようなみじめさを感じました。三十キロ離れた所からのいもづる運搬が一番きらいです。にぎやかな街を通り、とくに夕方は、買物に出だすサラリーマンの奥さんで賑やかな街、ジャンパーにじたび姿で運転している自分に強い劣等感を持ち、早く街をとおり過ぎたいとあせつて運転します、この慰めにかすりのモンペをはかず。サージのズボンをはいたというだけで多少心が救われました。

〔原文ママ〕（『農業千葉』第16巻第11号 p.89）

「サージのズボン」という、農作業着とは異なる生地洋服を着ることで自身の在り方を少しでも肯定していく様子を読み取れる。その他にも1966年には「友だちがシャレタ姿でお勤めにでるのを、どんなにうらやましく感じたことでしょう」（『農業千葉』第20巻第4号 p.9）という記事もあり、勤め人が遠い存在ではないことや、ファッション文化を取り入

れることができるかどうかということも、女性農業者にとっては軽視出来ないことであったことがうかがえる。また、1972年には、「私と同じ立場の人は、クラスでも数人おりましたが、家へ残り、農業をしようとしたのは私ひとりでした」(『農業千葉』第26巻第6号 p. 86)と、クラスの中で自分だけが農業に従事するということへの焦燥感を感じる。都市近郊という立地や農村における女性のライフコースの変化、兼業化による女性農業者の位置づけの変化等に伴い、当時の千葉県若年の未婚女性農業者にとっては、女性像の交錯による葛藤や焦燥感を感じる事が身近であったことがうかがえる。

4.4 農業普及事業と雑誌『農業千葉』の編集方針

最後に『農業千葉』の発行に関わる農業普及事業について見ておきたい。農業普及事業自体の特色は、指導の重点を物から人に指向したことと、農家の生活改善を取り上げたところにあるという。従来は、一方的な指導であったが「自主的に考え、農業を営み得る農業者の育成」(社団法人全国農業改良普及協会 1968a: 11)といった転換があった。また、農家の生活改善についても、従来は精神運動的であったが「農家の生活改善の意欲をもちたて、合理的な生活の技術、知識を提供して農家自らの手で生活改善をなしとげるように援助」(社団法人全国農業改良普及協会 1968a: 11)するといった具体性をもったものであったという(社団法人全国農業改良普及協会 1968a)。

とくに生活改善については、農業人口の流出、主婦の農業労働の増加等により「農山漁村における主婦の労働過重が目立ち、主婦の健康が阻害されるおそれがあるばかりでなく、家庭生活の粗放化が問題」(社団法人全国農業改良普及協会 1968a: 43)になっていたという。その改善のために家事労働の合理化等が進められていた。

このような事業の普及誌である雑誌『農業千葉』は、前述したように千葉県の農業指導の内容が掲載され(引地 2003)、1947(昭和22)年の戦後直後の混乱期に、農業関係者内での情報共有や連携を通じて、農業の発展を目的にして発行された。『農業千葉』は、関係者が一体となれるように農家、研究者、普及指導者の橋渡しになることが期待されていた(廃刊特集号 2003: 13)。1968年に発行された『協同農業普及事業二十周年記念誌』によると、『農業千葉』の編集方針は「農業及び生活改良普及員が普及活動上副テキストとして活用できるように配慮している」(社団法人全国農業改良普及協会 1968b: 77)となっている。1968年以降の編集方針に関しての詳細は今後の調査によるが、少なくとも本稿の対象時期の初期はこのような編集方針であったと言える。

5 若年の未婚の女性農業者という存在

ここまで、雑誌『農業千葉』の表紙に若年の未婚の女性農業者が登場していた時期のうち、対象にした「1965-1974年」を中心に、女性雑誌における女性像と女性農業者への期待、千

葉県の農業状況について概観してきた。これらのことと若年の未婚の女性農業者の存在との関係性を見ておきたい。

5.1 女性雑誌における女性像

1) 未婚の若年女性への注目

本稿の対象時期の女性雑誌では、実用的な情報を活用できるような主婦像と「主婦予備軍」である若年の女性像がすでに発信されていた。1970年代に入り転換点を迎えた女性雑誌では「青年期未婚女性」像が発信された。消費の領域での「女性の自己主張と、女性向け消費市場の開拓」の中で、消費の主体として期待され、これまでの家族の中の若年女性とも若年の男性とも異なる「女性の自立や自由の拡大」が促されるような女性像が提示されていった。1970年代以前の女性雑誌では、主婦、あるいは主婦予備軍という、既婚か未婚かという違いはあるが家族内女性役割を引き受ける女性像の提示があり、その後、主婦予備軍とは異なる「青年期未婚女性」像が誕生したことになる。未婚という点では、それ以前の主婦予備軍と同様のライフステージにはいるが、家庭内の役割に結びつけられる女性像とは異なり、消費という限定的な領域ではあるが「女性の自立や自由の拡大」促す女性像の提示であった。

2) 「美しさ」という役割

また女性雑誌の情報の幅も広がっていた。既婚女性向けの実用的な情報の発信から、恋愛結婚に憧れる女性を想定し、恋愛やメイク、ファッションといった情報の発信があった。さらに、被服の流通の発展により「青年期未婚女性」では、ファッションの発信が進展した。未婚の若年女性に注目すると、1970年以前の「恋愛結婚を夢見る若い未婚の女性たち」という、やがて結婚に包摂されるためのファッションか、その後の『『女の子』という未婚青年期のアイデンティティの主張』のためのファッションかという小さいとは言えない違いがある。しかし、両者ともにファッション化の進展という、井上が指摘していたように「新たに『美しさ』役割が期待されるという、ジェンダー規範の再編成」があり、「美」への注目や追及が進展していた時代の中にあっただことが分かる。

5.2 「主体的女性農業者」

本稿の対象時期の女性雑誌では、女性像の発信やジェンダー規範の再編成の中で「農家のなか」は周辺化されていった。しかし、当時の農業の問題の一つとしては、兼業化による農業の主婦化とそれに伴う主婦の過重労働が指摘されていた。過重労働には、加勢川が指摘していた「農業の肉体的労働ばかりでなく、その精神的労働まで背負い込む主婦」というように、農業経営の責任が追加されていた。性別役割分業が進展していた時代であり、志向としては主婦が家庭管理に、より携わることが提起されていたが、実際としては農労働も家庭内管理もこなせる「主体的女性農業者」が求められていた。このことは、過重労働にもなる

し、一方で、家族関係のパワーバランスの変化につながることも指摘されていた。

また、農業普及事業は、農業改善と生活改善を通じて「自主的に考え、農業を営み得る農業者の育成」や「農家自らの手で生活改善をなしとげる」ことを目指していた。とくに生活改善では家事合理化を目指していたことから「家庭経営の責任者である主婦」への期待があったと考えられる。その中には、兼業化の進行も重なり、実際は天野が『農労働も完全に、家事も手を抜かずに』というスーパーウーマン」と指摘したような女性農業者がいたことがうかがえる。つまり、普及事業で目指した主体性を伴った農業と家庭生活運営を担える人材育成は、両者を担える女性農業者の育成にもつながった可能性もある。そこには、家庭内の性別役割分業を求められつつも農労働も主体的に行うという、家庭役割も仕事もという現代の共働き家庭の女性にも通じるような問題が、本稿の対象時期の女性農業者にもあったことがうかがえ、現代に先んじていたとも言える。

さらに、このような女性農業者像は、主婦や嫁といった家族関係との関係から捉えられ、家族内女性役割を引き受ける女性として捉えてられていたことがうかがえる。青年期の農業者に関する調査や後継者の問題⁽⁷⁾等の検討が必要だが、本稿が対象にしている若年の未婚の女性農業者は「主婦予備軍」として捉えられてきたことが予想される。表1に示したように、キッチンに立つ女性やエプロンを身に着けているように見える表紙があることからもうかがえる。

しかし、女性農業者における「主婦予備軍」は、先述した女性雑誌の「主婦予備軍」の女性像とは異なる点もある。たとえば、恋愛結婚を望みながら束の間の未婚期を過ごす「BG」や「OL」は、職業としては中心とはいえない周辺化されたものであった。一方で、雑誌『農業千葉』の若年の未婚の女性従事者は、家族内経営であったとしても農業に従事しており、周辺化された仕事というよりは農業への自負が読み取れるものでもあった。たとえば、1972年には「これからの農業は、高度な知識は技術を必要として、だれにでも従事できる簡単な職業ではありません」（『農業千葉』第26巻第5号p.86）というような記述がある。また、1965年には「これからの農業は自然相手だけでなく、技術と投資による企業的農業へと進むべきだと思います。現在私の経営からみて一番の問題点だと考えているのは、市場価格の不安定です」（『農業千葉』第19巻第2号p.89）といった農業経営への視点もある。1974年には「農家の主婦は農作業に追いまくられ、ゆっくり育児や家事をする暇などありません。そんなときこそ家事作業が充分でき、自分の時間がもてるような経営の方法を考える必要があると痛感します」（『農業千葉』第28巻第3号p.70）と、農業経営者としてのワークライフバランスへの言及もある。農業者としての主体性を持ちながらも、家庭生活の運営への責任も持つという、いずれは天野が指摘していた「スーパーウーマン」としての女性農業者像につながる道を内面化していたのかもしれない。

このような女性農業者像を先の女性雑誌にみる女性像から見ると、「落ち着いて自制的である『主婦』」と「主婦予備軍」という既婚か未婚かという違いはあるが家族関係から捉えら

れる女性像と同様の様相として捉えられる。『農業千葉』は普及誌であり、当時の『農業千葉』の編集方針の方向性は「農業及び生活改良普及員が普及活動上副テキストとして活用できるように配慮」されたものであった。つまり、若年の未婚の女性農業者を表紙に採用し彼女たちの文章を掲載することは、当時の普及活動を展開していくにあたり、普及させる、あるいは、普及させたい女性像であったという解釈もできる。どのように講読されたものかについての調査が必要になるが、女性農業者だけを対象にした雑誌ではないだろう。兼業化の進行やそれに伴う家族関係性の変化もあったことから、『農業千葉』を通じた「スーパーウーマン」としての女性農業者像の発信だったのかもしれない。

一方で、消費領域での主体として描かれた「青年期未婚女性」像のような自由さを読み取ることは難しく、類似性のある女性像とは言いづらいただろう。しかし、あえて女性の主体性という点に注目するならば、若年の未婚の女性農業者にも、家族内役割とは異なる領域の農労働の主体としても描かれる女性像が見える。また、『農業千葉』の表紙の女性も、「主婦予備軍」や「青年期未婚女性」と同様に、「農家のかか」を周辺化させた要素の一つでもある「美しさ」の役割が期待されているという共通点もある。

これらのことから、『農業千葉』の若年の未婚の女性農業者の表紙と文章群は、「主婦予備軍」ではあるが家族内役割だけにとどまらない主体性と「美しさ」を期待された女性像を表現していた可能性がうかがえる。それは、「主婦予備軍」と「青年期未婚女性」との交錯がありながらも、それらとは異なる、当時のもう一つの若年の未婚の女性像であったのではないだろうか。

6 今後の分析に向けて

本稿では、雑誌『農業千葉』の表紙を飾った若年の女性農業者の役割を探究する準備段階として、本稿の対象時期の女性雑誌に見る女性像や千葉県の農業、農業普及事業について概観し、表紙の女性像を当時のもう一つの若年の未婚の女性像として捉えられる可能性を示唆した。しかし、前述したように分析対象自体が十分な量とは言えず、不足している調査もある。今後は次の点の調査を進めていく。

まず、『農業千葉』の編集方針である。1968年時点での編集方針は先に示したが、その後の展開については不明である。また、表紙の女性が書いたとされる文章についても、どこまで編集の意向が関わっていたのか、さらにどのように購読されることを想定していたのかと



図1 昭和30年代の『農業茨城』の表紙の一部
出典『農業茨木 創刊40周年記念誌』P.6より抜粋

いうことは検討する必要がある。また、他県の農業普及誌の調査も必要だと考えられる。たとえば、茨城県の農業普及誌である『農業茨城』の「表紙にみる農業茨城の40年」においても、昭和30年代には図1のような表紙がある。

図1は『農業茨城』のほんの一部だが、『農業千葉』のある時期の表紙との類似性が見られる。そのため、普及誌の傾向、または、農業雑誌の傾向なのかということも視野に入れる必要もある。前述した『現代農業』の表紙研究以外でも、たとえば『家の光』といった農業雑誌の表紙や若年の未婚の女性農業者の位置づけ等との比較により、普及誌における若年の未婚の女性農業者像の特徴が先鋭化する可能性があるため、調査を進めていきたい。

また、本稿では表紙の撮影者には注目をしてこなかった。これまでは文章群に注目してきたため、対象時期の表紙を構図等から類型化したわけではないし、対象時期の女性雑誌の実際との比較には至っていない。そのため、表紙の類似性や分類方法についての検討も進める。坂本は女性雑誌の口絵の人物像の分類や、雑誌全体のカラー率や総ページ数に占める写真率、イラスト率や記事の抜粋の紹介等を詳細に行っている（坂本 2019）が、管見の限り機械を用いた分析手法は用いられてはいない。分野の異なる雑誌のどの部分に注目するかについての検討も必要だが、デジタルヒューマニティズからのアプローチも検討していきたい。

次に、当時の青年期の農業者についてである。当時の農家における主婦像のさらなる探究が必要だが、それ以外に青年期の農業者の育成や期待等についても今後の探究が必要である。千葉県には農村中堅青年養成所があり、女性の入所も途中から認められ農業人材の育成が行われてきた。ここでの人材育成と本稿で見てきた『農業千葉』の女性農業者像等との関連性についても検討していきたい。

これらの調査を進め、再度、表紙の若年の未婚の女性農業者が書いたと考えられる文章群との照らし合わせをし、女性像の先鋭化とそれを普及誌で発信することの意味等について

の探究を今後の課題としたい。

謝辞

本研究は JSPS 科研費 JP 22H00901 の助成を受けたものです。

注

- (1) 本稿で使用した『農業千葉』の発行は以下のようになっている。第3巻5号-第5巻第9号：みやこ農業千葉発行所。第5巻第10号-第35巻第9号：農業千葉刊行部。
- (2) 『農業千葉』における千葉県の農業の特徴による時代区分を参照にした。そこでは、女性たちが書いたと考えられる記事の掲載期である1960年代前半は「農業基本法の制定と農業の近代化」、1965-1974年は「計画的生産への誘導が始まった高度経済成長時代」、1980年代は「『むらぐるみ農業』と生産構造の改善」と区分されている（千葉県農業改良協会2003）。
- (3) 「1980年代」は6記事であり、記事数も極端に少なく、特徴語も「専攻」、「鴨川」「頑張る」といった独自のものとなっている（七星2023）。
- (4) 長船によると『現代農業』では女性が表紙モデルになるのは1974年-1985年に集中しているという。時代背景として高度経済成長期による都市部への若者の集団就職を経て、オイルショックや集団就職の終了により農村に残って就農する若者をモデルにしやすかったこと、1985年の雇用機会均等法の成立などをあげている（長船2021）。
- (5) 天野によると、当時は農業の収入は依然として「家」のものであり、個人への配分は検討されていなかったという。
- (6) 天野寛子は、「農家の女性ないしは農業に携わる女性または農業の周辺の女性」（天野2001: 21）の呼称の移り変わりに注目している、天野によると「女性農業者」の初出は1991年の『農業・農村の変化に伴う農村婦人の役割に関する調査報告書』だが（農山漁家生活改善研究会が発行）、一般化しなかった。その後、それまで土地の名義人でないために加入が拒否されていた女性に農業者年金への加入が検討され始め、1994年には「女性農業者」が、「農業を職業としている女性」（天野2001: 26）という意味で使用されるようになったという。
- (7) 1968年には表紙の女性が書いた「近代化、合理化され住みよくなった、とはいえ離農問題、嫁婿不足はいつそう深刻化しています。」（『農業千葉』第22巻第3号p.9）といった記述があったり、同年には「農業後継者育成」という特集も組まれていた（『農業千葉』第22巻第5号）。

参考文献

天野寛子, 2001, 『戦後日本の女性農業者の地位——男女平等の生活文化の創造へ』 ドメス

出版.

- 千葉県農業改良協会, 2003, 『「農業千葉」廃刊特集号』千葉県農業改良協会.
- 橋本嘉代, 2017, 「ライフスタイルの多様化と女性雑誌——1970年代以降のセグメント化に注目して」吉田則昭編『雑誌メディアの文化史——変貌する戦後パラダイム [増補版]』森話社, 163-192.
- 茨城県農業改良協会, 1988, 『農業茨城 創刊四十周年記念誌』茨城県農業改良協会.
- 井上輝子, 1989, 「1970年代以降の女性雑誌界」井上輝子・女性雑誌研究会著『女性雑誌を解読する COMPAREPOLITAN——日・米・メキシコ比較研究』垣内出版, 17-47.
- , 2008, 「マスメディアにおけるジェンダー表象の変遷」『現代社会とメディア・家族・世代』新曜社, 204-226.
- 加勢川堯, 1972, 「家族農業と主婦」『農業経済』38(13): 37-44.
- , 1975, 「農村婦人の新しい役割——家庭経営者としての主婦像を求めて」『農業と経済』41(6): 17-22.
- 七星純子, 2023, 「雑誌『農業千葉』における若年女性農業従事者の記事分析——KH Coderを用いたアプローチ」『千葉大学大学院人文公共学府研究プロジェクト報告書』(278): 13-26.
- 七星純子・米村千代, 2019, 「雑誌『農業千葉』にみる戦後農業の変容過程——千葉県における60年間の軌跡」『千葉大学大学院人文公共学府研究プロジェクト報告書』(345): 58-73.
- , 2020, 「農業雑誌における若年女性農業従事者の語りの変遷——雑誌『農業千葉』を対象とした予備的考察」『千葉大学大学院人文公共学府研究プロジェクト報告書』(355): 79-95.
- 農林水産省, 2023, 『農林業センサス累年統計——農業編 (明治37年～令和2年)』
「総農家等 専兼業別農家数」(取得日 2024年1月4日, 農林水産省ホームページ・
<https://www.maff.go.jp/j/tokei/census/afc/past/stats.html>) .
- 落合恵美子, 1990, 「ビジュアル・イメージとしての女——戦後女性雑誌が見せる性役割」女性史総合研究会編『日本女性生活史5 現代』東京大学出版会, 203-234.
- 長船亜紀子, 2021, 「雑誌『現代農業』表紙にみる女性農業者——1960年代から20世紀末まで」『千葉大学大学院人文公共学府研究プロジェクト報告書』(361): 17-33.
- 坂本佳鶴恵, 2019, 『女性雑誌とファッションの歴史社会学——ビジュアル・ファッション誌の成立』新曜社.
- 隅谷三喜男, 1996, 『成田と空と大地』岩波書店.
- 社団法人全国農業改良普及協会, 1968a, 『協同農業普及事業二十周年記念誌』協同農業普及事業二十周年記念会.

- , 1968b, 『協同農業普及事業二十周年記念誌 資料編』協同農業普及事業二十周年記念会.
- 竹内義長, 1964, 「千葉県農村中堅青年養成所の経験」宮原誠一編『農業の近代化と青年の教育』農山漁村文化協会, 193-215.
- 編, 1987, 『戦後千葉県農業の歩み 農業千葉創刊 40 周年記念誌』千葉県農業改良協会.
- 鶴理恵子, 2007, 『農家女性の社会学——農の元気は女から』コモンズ.

(ななほし じゅんこ 千葉大学人文社会科学系教育研究機構 特任研究員)